

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 0 8 号

『思出の記』を読む、2倍楽しむ～モデルを探して …	八角 泰正… 1
鵠沼海岸の伸び縮み？	西村 望…19
くげぬま断章 (Ⅷ)	
路可さんの「聖家族」と「釈迦像」と	山上 英男…23
「藤沢の巨樹めぐり」プロジェクトを終えて	佐藤 弘…29
選りすぐりの巨樹を見る	岡田 哲明…40
榎の木 回想	森岡 澄…42
事業報告	
第37回 鵠沼公民館まつり展示部門参加	45
「総合ミュージアムを語ろう」展に出展参加	47
今井達夫著『鵠沼物語』活字化・冊子制作	48
Coffee break	50
今井達夫遺稿⑬「耕二郎の老年」	今井 達夫…54
活動の記録 (平成25年10月～26年3月)	総務担当…63
編集後記	66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

『思出の記』を読む、2倍楽しむ

～ モデルを探って

八角 泰正（鵜沼桜が岡在住）

はじめに

徳富蘆花著『思出の記』は、鵜沼を描く美しさ及びボリュームの点で第一級の鵜沼関連図書といえる。「藤沢の地名」（発行：藤沢市）での鵜沼区域の記述冒頭には、鵜沼海岸銀座の古い写真に添え、キャプションとして『思出の記』の一文が引用されている。

... 砂畑を行き尽して、畑のそばだった砂山を上り、翠影婆娑たる松林にはいると、さすがに冷たい風が吹いている。僕らはその松林を縫って、もっとも影深いあたりに行った。ここは松山の半腹、紫幹翠葉の間から富士足柄箱根大山高麗山がちらちら顔を出し、白帆を浮かべた相模灘の漫々たる青海原も松の間々に透いて見える。浜に海水浴客の帽は見えて、騒がしい声は聞こえず、颯々たる海風松を梳って、翠香動き、紫影そよぎ、もしここに結んだら夢もまた香しかろうと思われた。蟬の音すらここでは涼しく聞こえる。...

『思出の記』は鵜沼を深く研究する材料になるものではないが、鵜沼を、今まで以上に深く好きになる材料になる、鵜沼住民にお薦めの一冊である。

ここでは、『思出の記』を読むのに、好奇心を大いに発揮し発見と感動を得、2倍楽しんだ体験談を綴ることにする。

そのポイントは、『思出の記』に書かれた登場人物のモデル探しである。

何故、『思出の記』か

私にとって藤沢は、かつては My Bed Town、それがリタイアしたことで正真正銘の My Town になった訳で、地域を深く知ろうと思いついたのである。

単なる読書でなく、刺激となるドラマとロマンを求め、例え自分には叶わずとも、発見さえあれば感動があると考えたのである。無論、選んだ対象は鵜沼。

こうして、『思出の記』に出会い読んだのである。しかし、それだけで“モデルを探そう”、“2倍楽しんだ”と思った訳ではない。

丁度その頃、私はハワイに行ったのである。私は、ハワイ島が大好き、と言うよりハワイ島しか知らないのである。ハワイ島では、これまた好奇心旺盛に様々探訪した。そのハワイ島で、地元の人から、ある牧師の話、教会の話を聞いたのである。そこに、『思出の記』との接点を発見したのである。

また、大河ドラマ「八重の桜」の放送もあり、私の話に出てくる人物も多く登場したことから益々楽しくなったのである。

『思出の記』とは

『思出の記』は、前半が冒険小説、後半ラブ・ロマンスという小説である。単純ではあるが、そのつながりには少し違和感も感じられる。

一体、これは徳富蘆花の自叙伝なのか、はたまた、フィクションなのか。しかし、“名家のお坊ちやま”である蘆花にこんなドラマチックな冒険があるとは思えない。これは蘆花の足跡を追ってみる必要があると思わずにはいられない。

ドラマチックな出会いが沢山あって、冒険ということになるのだが、一体、どんな環境、どんな風土から生まれたのだろう。ビジュアル的には、昨年放送された大河ドラマ「八重の桜」が理解の助けになる。

蘆花が書いた明治のベストセラー「不如帰」は、逗子の旅館・柳家に逗留中に避暑客から聞いた話をもとにモデルを設定して書いている。『思出の記』も同じスタイルなのではないかと思うのである。

これから、楽しい発見に至るまでのアプローチを、紹介していく。

徳富蘆花のプロフィール

蘆花は、明治元年生まれ、昭和2年、59歳で亡くなっている。父・徳富一敬、母・久子。姉が5人、兄は猪一郎、後の徳富蘇峰。徳富一敬は、肥後藩藩政改革の中心となった人物である。蘆花の本名は徳富健次郎。

10歳で兄・蘇峰と共に同志社英学校に入るが、蘇峰は新島議の“自責の杖”事件と関連し、卒業目前に同志社を退学する。蘆花も少し遅れて退学、熊本に帰り共立学舎に入学、その後、14歳で兄が主宰する大江義塾に入っている。同志社英学校での流れは、大河ドラマ「八重の桜」で見てのとおりである。



徳富蘆花

17歳の時、熊本で洗礼を受け、その後、兄・蘇峰との折り合いが悪いことなどを家族が慮り、従兄・横井時雄のいる今治教会にあずけられる。『思出の記』のモデル探しの上では、キーポイントである。

その後、18歳で再び同志社に入学、京都に出るが、そこで山本久栄と出会い恋に落ちる。しかし、その恋は成就せず、京都から逃げ出し放蕩の旅に出ている。これも、大河ドラマで放映されたとおりである。

その後、様々な経過をたどり、東京で蘇峰が主宰する「国民の友」の記者生活を送ることになる。これが、文筆活動の端緒となっている。

26歳で、原田愛子と結婚、32歳でベストセラー小説「不如帰」を出版する。

明治34年には鶴沼に逗留、『思出の記』を出版している。(先ず、明治33年、国民新聞に「おもいで」の記」が掲載され、その後単行本となったもの。)

明治36年に「黒潮」を出版し、その巻頭で「君は国力の膨張に重きをおいて帝国主義を執り、余は人道の大義を執り....」という蘇峰との決別の辞を書き、蘇峰とは別の道を歩くことになる。この年、堺利彦の訪問を受け、以降社会主義者に親近感を抱くようになっていく。

徳富蘇峰は、ジャーナリスト、歴史家、評論家、政治家として活躍したのだが、平民主義から右翼へと変節、最後はA級戦犯容疑・公職追放になっている。ヒューマニストの蘆花とは対照的な人物であった。この雰囲気を表しているのは、大河ドラマ「八重の桜」の最終回で蘆花がポツンとつぶやく印象的なシーンである。

明治39年には、パレスチナ巡礼を経て、ロシアにトルストイを訪ね、彼の家に5日間滞在している。蘆花はトルストイの感化を受け、帰国後“美的百姓”を標榜し晴耕雨読の生活を始めている。場所は、現在の世田谷・芦花公園の恒春園である。当時は、都心から離れた不便な場所であった。

明治44年には、大逆事件の首謀者とされた幸徳秋水の死刑を阻止するために活動し、一高の弁論部・川上丈太郎などが企画した講演会では「謀叛論」の題で講演、学内に騒動を巻き起こしている。この直前に秋水は処刑されている。

その後は、夫妻でよく旅行に出かけていて、大正8年には夫婦で世界一周旅行に出ている。最後は療養の地・伊香保で亡くなっている。

蘆花という号の由来は、自ら述べている「『蘆の花は見所とてもなく』と清少納言は書きぬ。然もその見所なきを余は却って愛するなり」で明らかだが、蘆花のキャラクターを良く物語っている。

『思出の記』のあらすじ

皆さんに是非とも読書を奨めるものであり、ここで内容を詳述するのは野暮であるが、ざっと眺めてみることにする。

主人公は、“僕” 菊池慎太郎。1863 年、九州の真中、高鞍山を望む妻籠の生れである。菊池家は、南朝の忠臣の末裔、村一番の名家であったが、破産。父も亡くなり、伯母の家・野田家に住まうことになる。母・節は、名家に生まれ名家に嫁いだ女で女子教育の熱心家、賢母・賢婦人である。叔父の野田大作は、由緒ある郷土、英雄型人物、文明的殖産家である。大作の名のとおり、大漢・大胆・大食である。

僕は、西山塾に入塾。ここで、生涯の友人・松村清麿を得る。西山塾が閉じた後は育英学舎に入学、そこで先進的な教育者・駒井哲太郎先生に出会っている。

駒井先生が家庭の事情で学舎を去り、また、野田家で僕の微妙な立場もあって、かねてから松村清麿の勧めのあった上京を決行することになる。これが、ドラマチックな冒険となる。

僕は、冬の12月23日に、お金6円を携え、野田家を出奔、熊本～別府～大阪～上京を目指す。しかし、別府で護摩の蠅に4円騙し取られ、宇和島經由土佐行きに変更するのだが、宇和島でもスリに遭い一文無しになってしまう。あげく行き倒れになるのだが、金貸しに救われ、そこで暫し働くことになる。そんな折、宇和島で唯一英語に触れたことのある僕が、道を尋ねる外国人宣教師を助けるなどして、新しい触れ合いが生まれる。宇和島逗留中に出かけた松山では、生まれて初めて教会・耶蘇教に出会い、志津牧師と知り合う。

志津牧師の薦めもあり、大阪に出て関西学院に入学、キリスト教教育と触れ合う。関西学院では「菅先生事件」が発生し、卒業間近にも関わらず僕は退学届を出すことになる。そして、方向転換、東京帝国大学・文科を目指し、上京する。

東京では、当面の生活の資を得るために、平民新聞社でアルバイトをしながら、入学試験に向け勉強するのだが、そこで主筆の佐藤氏に出会う。佐藤氏は、実は尊敬する育英学舎の駒井先生であったのだ。

東京での生活では、一ツ橋の女学校に入っていた松村清麿君の妹・敏江と再会したり、女学校を経営している伯母の世話になるなどして暮らす。

僕は、この敏江に恋心を抱き、それが発展する。その舞台は、鵜沼。そこでの描写が、冒頭にあげたものである。

そして僕は、敏江と結婚し幸せな生活を送るのである。

他の人々のその後は、母は、婦人矯風会の補助、野田叔母は、長く女学舎を運営、松村清磨君は、衆議院議員、妻（敏子）は、文筆活動と活躍するのだ。

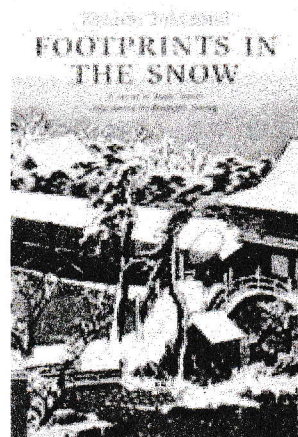
そして僕は、“相かわらず眼高手低の嘆を漏らしながら、理想を目がけて蝸牛の歩みを運びおり候”。

『思出の記』は、翻訳され英語でも出版されている。タイトルは、**FOOTPRINTS IN THE SNOW** である。鶴沼描写の一部、原文を紹介する。

... Outside, the fierce noonday sun shrunk our shadows to our feet, its heat reflected all around us from burning sand. A fine white dust covered the fields of soy and sweet potato. Our eyes smarted from the brilliant light, and before we were bathed in sweet. But beyond the sandy fields, over the dunes that bordered them, a breeze blew cool among the green rustling shade of a pinewood. From the shadiest spot halfway up a little hill within the wood, Mount Fiji and the peaks of Hakone peeped through the trees, and below, white sails festooned Sagami Bay, we could see the caps of the sea-bathers, but hear none of thier shouting. The wind combed gently though the branches, weaving restless patterns of light and deep green shade, and pouring such fragrance into the air around us that sleep in such a spot would surely have brought pine-scented dreams. Here even the chirruping of the cicadas sounded cool.

私の稚拙な翻訳では、次のようになる。

...しかしながら、砂山で区切られた砂畑の向こうに、松林の緑のざわめきの中、涼しい風が吹いていた。その林の中の小高い丘の中腹、木陰から、富士山や箱根の峰々がちらちら見えていた。その丘の下には、白い帆が相模湾を花網飾りのようにし、海水浴客のキャップも見ることでもできたが、彼らの声を聞くことはできなかった。風は、絶え間なく動く光と深い緑で織り成される枝の間を梳づき、私たちの周りを取り囲む空気に松の香の夢をもたらすに違いなかった。ここでは、チッチッと鳴く蟬の声すら心地よく聞こえた。



『思出の記』英訳本

これを見ると、先ず、蘆花の美文に感嘆せずにはいない。そして、日本語の語彙の豊かさに、改めて誇りを感じるのである。私の稚拙な訳ですら、優しく感じるのであるから。また富士・箱根は書かれているが、足柄・大山・高麗山は、さすが無視されている。これも、外国に対する知名度の象徴であろう。

『思出の記』の時代、周辺の人々

次なるアプローチは、蘆花が生きた時代の人々を眺めてみることである。無論、蘆花の周辺だけであるが。注目するポイントは、「八重の桜」に登場する人物との重なりである。

維新の十傑： 薩摩藩／西郷隆盛、大久保利通、小松帶刀、肥前藩／江藤新平、
長州藩／大村益次郎、木戸孝允、前原一誠、広沢真臣、
肥後藩／横井小楠、公家／岩倉具視 を指している。

横井小楠は、坂本龍馬の師であり、龍馬が作った“船中八策”は、小楠の「国是七条」を基にしたものだと言われている。更に、「八重の桜」に出てきた山本覚馬の“管見”も、同様に小楠の「国是七条」を参考にしたと言われている。坂本龍馬は、横井小楠こそ、明治新政府の首相に相応しいと考えていたのである。

横井時雄 大河ドラマ「八重の桜」では、伊勢時雄として登場、山本覚馬の娘・みねと結婚。横井小楠の長男で、同志社の第三代社長。時雄は、伊勢姓以外にもいくつかの姓を名乗っている。これは、幕末の情勢と絡んでいる物語である。

同志社関係 創始者・新島謙、八重、同志社の命名者・山本覚馬

これらは、何れも蘆花と関係のある人物である。山本覚馬の下の子・久栄は蘆花が恋した女性である。

矢島直方 横井小楠の高弟、惣庄屋の子に生まれ江戸後期から明治にかけて活躍した公共事業家。維新後、堺や福岡県の参事官などを歴任、帰郷して、小学校の設置、水田の開発、茶の栽培指導など郷里の発展に尽くした人物。

矢嶋家を上げたのは、娘たち、竹崎順子（三女）・徳富久子（四女）・横井つせ子（五女）・矢嶋楫子（六女）が、近代日本における女子教育や婦人運動に

尽力、男女同権社会の礎を築いた人たちだからである。

四賢婦人、肥後の猛婦

矢島家から出た、「四賢婦人」と称される女性たち、明治のパワフルな熊本の女性を加え、熊本市の観光サイトでは、この女性たちを「肥後の猛婦」として紹介している。猛婦とは穏やかならざる表現だが、男の“肥後もっこす”と対比しての表現で、軽蔑している訳ではない。

竹崎順子（矢島家・三女）

明治における女子教育の先駆者で、明治 22 年熊本女学校（熊本フェイス学院高校）を創設。徳富蘆花の伯母であり、山本久栄との一途な恋に破れた健次郎が京都を出奔し放蕩を繰り返し、あげく熊本に連れ戻された時に、「なんの、よか、よか」と慰め、励ましたという愛情溢れる女性であった。

蘆花は、後に、伝記「竹崎順子」書き、その恩に報いている。彼は、「我に 3 人の母あり」として、実母、徳富久子とともに、竹崎順子と横井つせ子の二人の伯母・叔母をあげている。蘆花にとっては、「心の母」であった。

徳富久子（矢島家・四女）

徳富一敬に嫁いだ。徳富蘇峰・徳富蘆花兄弟の母。姉順子・妹楫子の女子教育・婦人解放運動を支えた人物。

横井つせ子（矢島家・五女）

横井小楠に嫁いだ。「夫は天下人である。妻たる自分も出来るだけ学問をし、夫の名を辱めることがないように」と励み、明治維新の大業に参加する小楠を支えた。また姉順子・妹楫子の女子教育・婦人解放運動を支えた。

矢嶋楫子（矢島家・六女）

明治 5 年上京、明治 23 年キリスト教系女学院（現 東京・女子学院）を創立。また明治 19 年、「日本キリスト教婦人矯風会」を設立し初代会頭に就任、婦人参政権・廃娼・禁酒運動等に貢献した。大正 10 年 89 歳の高齢でワシントン平和会議に出席の際、米ルーズヴェルト大統領から功績を称えられ記念の花器を贈られている。

海老名みや子

横井小楠の長女、海老名弾正（同志社第 8 代社長）と結婚。弾正は、改名前は、喜三郎（大河ドラマでは、この名で登場）。

湯浅初子（徳富初子）

禁酒・廃娼運動家。徳富蘇峰、蘆花の姉。女子の啓蒙教育と婦人矯風運動に尽力、東京婦人矯風会発起の一夫一婦制の刑法及び民法に対する建白書を元老院に提出している。

有名な話は、犬養毅との縁談で、男子の節操に対する見解の相違から、初子の方から破談にしたと伝えられている。夫・湯浅治郎は同志社経営に加わり、息子・八郎は同志社社長。

横井みや（海老名みや子）、徳富初子、横井玉子の3人は、熊本洋学校で、L.L. ジェーンズに学び、日本最初の男女共学教育を受けた人たちと言われている。

徳富愛子（原田愛子）

徳富蘆花夫人。蘆花と共に作家活動も行っている。熊本からの女子高等師範（現在の御茶ノ水女子大学）入学者第一号。



徳富愛子



竹崎通子



荒井梧子



徳富愛子

「肥後の猛婦」たち

出典：熊本市観光情報サイト

『思出の記』のモデルに迫る

いよいよ、核心に迫っていくことになる。

こうして、徳富蘆花の人となり、時代の背景、周辺の人々を辿ってくると、蘆花は「不如帰」のスタイルと同様に、モデルがあると考えつくのである。

まず、妻・愛子の故郷。… 熊本県菊池。蘆花は、それを取って主人公の姓を“菊池”としたに違いない。菊池市は、鞍岳を背にする地形を持っているので間違いない。

無論、お敏は、妻の愛子である。蘆花の出版では、愛子を共著とするものが少なからずある。愛子は才媛であり、蘆花も愛子なくしては希代の小説家とは呼ばれなかったかも知れないのである。

蘆花と言う人物は、実らなかった山本久栄との熱烈な恋、破綻後の不貞腐れた放蕩など実に人間臭い、愛すべき人物である。しかし、実は、ワンマン、かんしゃく持ちで、愛子に辛く当たったり、罵声を浴びせたり、あげく暴力も振るったようである。三従の精神で育てられて愛子は、耐えに耐える生活をしていたのである。しかし、明治 38 年、富士登山の際、蘆花が体調不良から人事不省に陥ったところ、愛子の必死の看護で生き返るという事件があった。これが転機となり、以降、蘆花も愛子に優しくなったとのことである。

こうしたことの罪滅ぼしからか、『思出の記』の中では、愛子夫人の故郷、熊本県・菊池市を取上げ、愛情を込めて描いているのだと想像できる。

ここで閑話休題、おしどり夫婦の里を紹介する。

徳富蘆花の妻・愛子は、菊池市隈府生れ。徳富蘆花・愛子は、銀婚式の記念に世界一周旅行に出かけるなど「おしどり夫婦」と言われている。

菊池市中心街「隈府（わいふ）」と、英語の妻「wife（ワイフ）」をかけて、菊池温泉では、“おしどり夫婦の里”、“妻を大切にする街”と観光振興のキャッチフレーズにしている。

また、二人に関わるトピックを紹介する。

世界一周旅行の中でパレスチナのナザレ（キリストの生誕地、現イスラエル）を訪れた時に残した句である。英語も、非常に分かり易い文である。

「姉妹むつみし ひたにかたらわば 闘う子等はあらじあらせじ」

If only the bond between the sister be firm, Fighting boys will
never be there, and shall be, too.

本題に戻り、次なるモデル推理とする。矢継ぎ早に書いてみる。

野田叔父は、矢嶋直方を彷彿とさせ、母は、蘆花の「心の母」である 3 人、実母・久子、竹崎順子、横井つせ子を思い浮かべることができる。また、東京で世話になる伯母は、矢嶋楯子を充てると楽になる。

志津牧師は、横井時雄。これは間違いない。

西山塾は、蘆花が学んだ兼坂塾、育英学舎は兄・蘇峰が主宰した大江義塾などが想像される。

また、主人公“僕”が卒業目前で退学することになった「菅先生事件」は、兄・

蘇峰が関係した同志社での「自責の杖」事件が当てられる。この時、蘇峰は、卒業を2ヵ月後に控えていたにも関わらず退学したのである。

これまでに紹介した人々を知れば、誰でも『思出の記』のモデルは容易に想像できるのである。しかし、主人公は簡単には思い浮かばない。

『思出の記』前半に描かれている冒険ドラマは何なんかな。まさにサラブレッドを輩出したエリート名家を眺めているだけでは思いつかない。わがまま・亭主関白、一方で愛妻家であったとも言われる徳富蘆花にそのようなドラマがあったのだろうか。名門のサラブレッドが家出をし、追いはぎにあって無一文、果ては行き倒れといったことがあるのだろうか。それともこれは、フィクションなのだろうか。主人公・慎太郎のお敏との美しい恋の思い出を飾るために作られた話なのだろうか。

実は、少し違和感のある筋書きにも、事実に基づく逸話があったのである。そのドラマチックなモデルに、私はハワイで遭遇したのである。

モデル探しは続く。そして“僕”の冒険ドラマを追う。

まず、冒険ドラマのキーになる徳富蘇峰と大江義塾を辿ってみる。

蘆花と蘇峰の関係を見てみよう。

幼少～若き頃は、「兄は天才、弟はグズ」といわれたりし、相性が悪かったようである。そして、蘆花は1903年に「告別の辞」を書き、蘇峰と決別する。最後には、療養の地・伊香保で和解している。

蘆花の葬式で、蘇峰は「弟は天才でしたが、弱虫で泣き虫でした。弟が成功したのは、私の影響ではなく、弟自身の力によるものです。」と弔辞を述べている。

次に、キーとなる大江義塾である。

大江義塾は、明治15年、蘇峰が18歳の時に創設したもので、教科は、歴史・経済・政治・漢学・英学などの他に、作文演説討論会、闘文会などがあった。

活躍した塾生には、宮崎滔天(寅蔵)、上塚周平、上塚真熊、上塚司、徳富蘆花、曾我部四郎などがいる。

ここで注目するのは、曾我部四郎という名である。私たちにとっては知名度が極めて低い存在である。

大江義塾での曾我部四郎は、屈指の歌上手・雄弁家であった。明治19年・第5回創立記念式では、生徒総代として演説を行っている。大江義塾の成績表が残っているが、曾我部四郎の成績は、“甲”である。

甲 丁 丙 甲 丙										甲 上	甲 上	甲 乙	甲 下	甲 上	甲	第四級生試験表
4	1	20	17	9	13	2	3	12	5	10	16	19	15	8	6	
74	88	52	57	67	59	86	78	62	72	66	57	55	57	68	71	曾我部四郎
148	176	104	114	133	117	172	53	123	144	122	114	110	114	135	142	曾我部四郎
74	88	52	51	60	53	88	69	57	68	54	46	38	38	62	71	曾我部四郎
74	88	52	63	73	64	84	86	66	76	68	68	72	76	73	71	曾我部四郎
575	700	417	503	583	513	750	905	506	605	545	517	574	610	583	570	曾我部四郎
85	83	53	85	85	78	100	100	100	100	80	60	56	85	100	80	曾我部四郎
50	52	45	50	53	50	75	50	45	50	50	53	58	45	68	55	曾我部四郎
100	100	0	100	100	95	100	100	100	100	100	90	90	100	100	100	曾我部四郎
65	85	60	70	65	65	85	70	80	70	60	60	70	80	85	85	曾我部四郎
50	100	70	50	50	50	60	00	50	60	60	70	60	90	70	50	曾我部四郎
80	90	55	50	45	80	100	95	0	90	50	80	70	90	70	50	曾我部四郎
45	90	30	50	85	45	80	75	75	65	45	45	50	70	60	90	曾我部四郎
100	100	100	50	100	50	75	00	80	70	100	90	100	40	50	60	曾我部四郎
佐渡	矢野	永松	宮川	上村	山代	曾我部	藤崎	松岡	藤崎	古閑	緒方	高橋	福岡	深水	額娃	
瑞穂	熊太	虎熊	辰成	敬二	重親	四郎	長寿	六郎	弥直	義三	和一	義貞	文太郎	末	孝之介	

大江義塾成績表抜粋

曾我部四郎の足跡を辿る ... ドラマである

曾我部四郎は、1865年（慶応元年）福岡県生れ、1949年（昭和24）ハワイ島・ホノムノ町で亡くなっている。

先ず、関連する歴史を少し辿ってみよう。

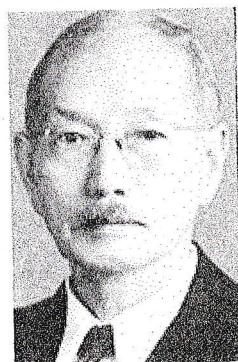
戦国時代、土佐を平定し四国の覇者となった大名に長曾我部元親がいる。長曾我部家は、豊臣秀吉との戦いに敗れ、お家断絶となるのだが、その末裔は黒河姓となり女系での血筋が続いた。その末裔・黒河通範は播州城主・黒田孝高*

（黒田官兵衛...26年の大河ドラマ主人公）に出仕したものの、城主の家名に重なる「黒」を憚り、母方長曾我部の姓から、長の字を省き「曾我部」を名乗ったのである。後、53万石筑前の国で、2000石の家臣となっている。

*天正10年の出来事とされており、その年代から推定し城主は黒田孝高とした。（著者）

この曾我部家の末裔に、傍流ではあるが曾我部四郎がいる。「四郎」にも関わらず長男で、これは嫡流から分家した始祖の元服名が四郎であったことに由来すると言われている。

この歴史を見ると、“南朝の忠臣の末裔”という『思出の記』主人公・菊池家の説明は、秀吉に忠誠を誓いお家断絶にあった長曾我部家と似ている。



曾我部四郎牧師

そして、その曾我部四郎は、親元から家出しドラマチックな体験をしているのである。曾我部四郎の流浪の最後はハワイに行き着く。日本では、「曾我部四郎」の知名度は極めて低いのだが、ハワイ、特にハワイ島では曾我部四郎の名前を知らない人はいないというほどの人物なのである。

曾我部四郎は、色々あって家を出た後、臨時教員、小使いなど苦難の放浪生活を送る。その後、明治16年、今治で横井時雄牧師に出会い洗礼を受けている。

この今治教会に蘆花がやって来たのである。その蘆花は、曾我部四郎を煽動し、熊本へと送り出し、大江義塾に入れたのである。蘆花は、送り出すに当り、初めて質入ということを行い、1円の金を用立て、更に母親から贈られた晴れ着を曾我部四郎に与えている。

熊本への旅は、徒歩で... 今治～松山～（海伝い）～佐田岬・突端に、そこから船で豊後に渡り、大分に入ってから徒歩で別府湾岸沿いに遡り阿蘇越えをしている。この間、牛小屋に無断で泊まったりし、髪・髭ぼうぼう、垢で黒くなった着物姿で熊本にたどり着いたのである。

大江義塾が閉鎖となり、同志社神学校入学するのだが、明治23年退学し、地方での伝道活動を行った後、明治27年、ハワイへ渡り、ホノム教会の牧師となっている。明治30年、ホノム日本語学校を創設（ハワイで4番目）し、『ホノム義塾』と命名している。ホノム義塾は、単なる寄宿学校でなく、孤児院、救貧院、矯正院、クライシス・センターとして機能した機関・施設であった。

曾我部四郎は、1949年（昭和24）、ホノムで亡くなっているのだが、教え子に託し、何故か、一切の資料を焼却している。

もうお分かりと思うが、焦点である『思出の記』主人公・菊池慎太郎のモデルは、この曾我部四郎なのである。

では、どのようにして曾我部四郎に行き着いたのであろうか。

それは、ハワイの旅、人情味溢れる風土の中で遭遇し、発見したものである。

ホノム義塾が開かれた時代の背景 ― 初期のハワイ日系移民の生活

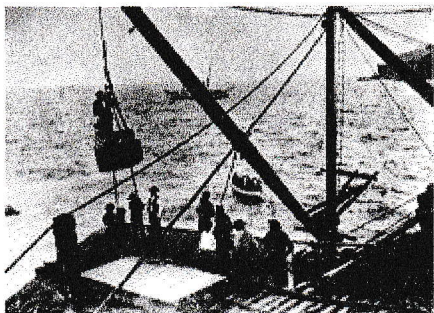
曾我部牧師が、ホノム義塾を設立・運営した時代は、どのようなものであろうか。初期のハワイ日系移民の生活を少し眺めて見る。

日系移民は、最初、何れ故郷に錦を飾るための「出稼ぎ」気分でハワイに来たのだが、現実には厳しい労働環境であった。その結果、生活は荒んだものになり、

孤児、DV、賭博、アルコールに溺れる者が蔓延していったのである。

当時の状況を示す2枚の写真がある。

1枚は、上陸の様子。まるで、モッコで吊られる荷物扱いである。もう1枚は、粗末な住居である。当時の状況を示している。



日系移民の上陸の様子



初期の日系移民住居

写真出典: “The Hamakua Coast”

その後、二世が増加し日系移民社会にも変化がおきる。

この状況を伝える象徴として、よく語られるのが子供達の会話である。

「Papa、Hana hana。House、おらん」——お父さんは仕事へ行って、家にいません——。Papa は英語の父、Hana はハワイ語の仕事である。

こういった状況の中で、曾我部牧師は、活動したのである。

まずは、日本語教育の必要性から、日本人学校が作られた。曾我部牧師以外にも、神田重英牧師、五味環牧師、奥村多喜衛牧師などが、活動している。無論、仏教系も、少し後になるが活動している。

曾我部四郎牧師の功績、人となり

曾我部牧師は、ホノムの人々への献身的な貢献から、ハワイ島内での尊敬・信頼は絶大であり、“ホノム聖人”と呼ばれている。しかし、曾我部牧師は、名誉・世評に全く無関心で、日本、米国からの多くの表彰・勲章の申し出があったにも関わらず一切辞退している。また、周囲の再三の勧めにも関わらず、長い間洗礼を授けるのに必要な按手礼を受けず、伝道師という地位にとどまっていた。按手礼を受けたのは50歳になってからである。

曾我部牧師の人柄を象徴するのが、1925年（大正14年）、ヒロ大和座での市民権問題についての演説である。これは、第二次世界大戦の15年も前に示した道徳

観だが、有名な第 100 大隊、442 連隊の日系兵士の活躍の精神的基盤になったに相違ない。

「日本若し戦わば… ～～ 先ず全塾生及び出身者を悉く我がホノム義塾に召集する。然して、右にハワイに生れし者、左に日本に生れし者を並べ、ハワイに生れし者は義まさに米国のために戦うべし、日本に生れし者は大日本帝国の忠勇なる人民である、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし……」、…… 「関が原合戦での真田父子の振る舞いこそ、武士道精神」(兄：信幸“関東の殊遇を受く、乞う東せん”、弟：幸村“大門の旧宜背く可からず 寧ろ西して死するとも東して生きず”、父：昌幸“東せんと欲するものは東せん、西せんと欲するものは西せよ。而して我西に与するものなり”

また、宗教・宗派を超えた活動も行っており、仏教・臨済宗の寺院創建や、問題の発生した仏教・日本語学校の再建の手助けなどもしている。他宗教へも寛容、。従って、他者に対する寛容さがあったのである。

曾我部牧師は、遺言で、ホノム義塾卒業生に委ね、一切の書類・資料を焼却している。このため、多くの謎が残ったままなのである。

ホノム義塾跡



20 世紀初頭のホノム義塾／ソカベ・チャペル
(Honomu/ Ishii family 所有写真)



ソカベ・チャペルの表示
(筆者撮影 2011)

左の写真は、私が、ハワイ島で地元の人に、「この教会は、今もありますか？」と聞いた時に、出したもの。答えは、「そこだよ!」。そして、ソカベ・チャペルの由来を教えてもらったのです。右の写真は、現在の整備された教会裏にある「ソカベ・チャペル」の表示である。

最後に、

私は、文学に触れ、郷土の歴史・由来を巡り、旅での遭遇を求める といったことをした訳だが、それは、鶴沼を描写した文学作品を辿り、映し出された人々・背景を辿り、ハワイ島で歴史を見つけ、曾我部牧師のドラマとロマンに行き着き、徳富蘆花との接点を見つけ、そして『思出の記』主人公のモデルを発見するという感動を生み出したのである。これで、『思出の記』の面白さが倍増したのである。

ここで、私が最も話したかったのは、実は、曾我部四郎牧師のことである。何故なら、そこにはヒューマニズムが溢れており、曾我部牧師を語るよう促す何かを感じたからである。ハワイ島で。

しかし、徳富蘆花、『思出の記』なくして、決してこのような気分になることはなかったと断定できる。

私は、このような雑学的読書を皆さんに勧めるのである。

なお、曾我部四郎牧師は、一生に3冊の本を出している。その1つが「もう三千弗」である。ホノム義塾の礼拝堂を建設するためにもう三千ドル必要であるということで、この本を出してその収益を充てようとしたのだ。この本には、原田助牧師と徳富蘆花が序を書いている。蘆花は、そこに、曾我部四郎牧師の青年時代のことを書いている。

そして、曾我部牧師は、『思出の記』の主人公モデルは私だ。」と周囲に語ったそうである。

(はっかく やすまさ)

参考文献、引用資料等；

- ・『藤沢の地名』（昭和 62.3.31 日本地名研究所編、藤沢市発行）
- ・『思出の記』（徳富健次郎著、岩波文庫）
- ・『明治大正文学「徳富蘆花」』（徳富健次郎著、春陽堂書店）
- ・『ホノム（保野武）義塾』（1985.8.10 中野次郎著）
- ・同志社大学講演資料（沖田行司教授講演 2005.11.9）

『新島譲の教えを受け継いだ人 ― ホノム聖人 曾我部四郎のこと』

- ・『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』（花立三郎他著、三一書房、1978）
- ・『もう三千弗』（大正 15.10.31 曾我部四郎著、丁未出版社）

<<付録>>

I. 『思出の記』 抜粋

『思出の記』には、鵠沼の描写が多く綴られている。冒頭の抜粋一文以外のものについても少し紹介する。

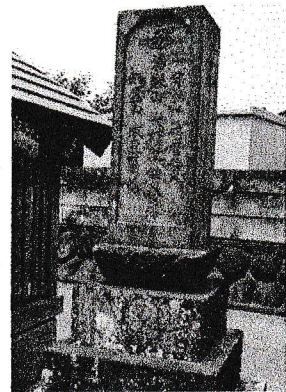
夕日弱って蟬の音なお残る村にはいって五六丁、道は二筋にわかれて、羽黒山云々と鑄った供養塔が立っている。

「少しまわりだがまあちょっと寄りたまえ、鵠沼一という水があるから」と松村が言うので、僕らは右に折れてまた一二丁、椿、珊瑚などのまじった寒竹垣の絶え間から、とある農家の庭にはいった。養蚕をすると見え屋根窓を開いた大きな農家だ。

そして、地元の多くの方が見たり知っている、原の辻（本鵠沼4丁目）に、文化6（1809）年建立の出羽三山供養塔がある。蘆花もこれを見たのであろう。

鵠沼市民センター・郷土資料展示室に、このことが取り上げられた神奈川新聞の記事がある。

『思出の記』の鵠沼描写について、もう少し、ここに書いておく。是非とも読むことを奨める。読めば益々鵠沼を美しく想うに違いない。



出羽三山供養塔
(本鵠沼、原の辻)

早出の農夫に道を譲っては浅茅にまじる昼顔の花の露したたか蹴散らし、夢というものの色はこんなものでもあろうかと思わるる青白い霧のまだ枝から枝へはう松原を穿っては浴衣も染まるほど満身の露を浴びして浜へ出た。清々しい朝景色だ。海はほの白うしてまだ光なく、つい対面の江の島も眠げに、右手に延いて長汀の松の梢むの富士、箱根、大山、いずれも薄りと夢さめあえぬ風情。

翌日 鵠沼館の横手の松原をぬけると、お敏君が鈴江君と僕らを尋ね来たるにはたと行き当たった。

お敏君は、きょうは藤色がかった縮みの浴衣に白襦袢を重ねて、帯は日用の紅、

素足に麻裏はいて、まだ露がこぼれそうな浜撫子花を持っている。

II. 「八重の桜」登場人物・キャスト（本稿に関係する人たち）

徳富健次郎（徳富蘆花）： 太賀

徳富猪一郎 → 徳富蘇峰（蘆花の兄）： 中村蒼

山本久栄（覚馬の次女、蘆花が恋した女性）： 佐藤風和 → 太田しずく → 今瀬葵 →
門脇麦

徳富初子（蘆花の姉）： 荒井萌

横井時雄（伊勢時雄、横井小楠の長男、蘆花の伯父）： 黄川田将也

伊勢みや子（横井みや、横井小楠の長女、蘆花の伯母）： 坂田梨香子

海老名喜三郎（改名→弾正、横井みやの夫、同志社第8代社長）： 阿部亮平

山川咲 → 山川捨松 → 大山捨松（山川健次郎の妹、大山巖の後妻）：

大谷美玲 → ほの花 → 愛川あおい → 水原希子

山本八重 → 川崎八重 → 山本八重 → 新島八重： 鈴木梨央 → 綾瀬はるか

新島七五三太 → 新島襄： 小林海人 → オダギリジョー

山本覚馬： 西島秀俊

山本みね（覚馬の長女、横井時雄の妻）： 中山香楽 → 谷川夢歩 → 千葉理紗子 →
豊嶋花 → 池田沙弥花 → 三根梓

金森通倫（熊本バンドのリーダーの1人）： 柄本時生

小崎弘道（熊本バンドのリーダーの1人、同志社第2代社長）： 古川雄輝

*小字は、成人前の配役

III. 徳富愛子『思出の記』あとがき

最後に、蘆花の妻・愛子が『思出の記』に付した“あとがき”を添付する。

一つは、「明治大正文学『徳富蘆花』」（昭和5年・春陽堂）、もう一つは、「思出の記」（昭和14年・岩波文庫）。『思出の記』が蘆花の人生で如何なる位置にあるのか、愛子の添え書きで知ることが出来る。なお、『思出の記』の著者名は、何れも徳富健次郎となっている。

『思出の記』は、何れも今では絶版となっているが、藤沢市図書館の所蔵はあるので読むことが出来る。

一 思出の記

不和歸と自然と人生で、幾らか自信もつき、力づけられた彼は、三十年の印象がどれもこれも跳り出て彼をよるを覚えた。彼はおさへきれぬ心で思出の記を書き初めた。晩夏なほ暑い日、朝から櫻山の父の四阿に上つて、よく藤を執つた。雲になると、彼の好きな車あびのフライでも出来た時は、勢よく私は車を運んだ。あえぎ／＼上ると彼は眼をあげて藤と迎へたものである。原稿紙片よせて、箸をとり食事の氣をとられて居ると、いたづらな風がサツと来て、大事な原稿紙をあら／＼こちらに吹き飛ばして、彼に氣をそめた事もあった。秋になつて居る東京原宿に移した當座、机など運送の荷物落くまでは、御行李を机代にしても、快く書き綴けたものであつた。上梓したのは明治三十四年五月で、且篇少々に、菊版にしたが、それでも五六七頁になつた。表紙の上頭部を單純な蘆花にばかした。

私共夫妻の意匠であつた。

彼は不知歸で「女」に泣き、思出の記で男の養生——成長を書かうとした。彼は自分が明治元年生といふに興をもつた。明治と共に生れ、明治と共に成長する一男——彼自身の妻は、やがて國民の、國の妻をあらはすものと知つた彼は、自己の成物を斷つた。献本の辭の裏に、エマソンを引いて居るも其心からである。彼は自己の成物と、彼に印象した三十年の周回とを生きかさんとしたのであつた。二人三人の境遇を一人のものとしたり、一を二に分つたり、特殊な性格に想像の未來を加へたりした。それゆゑ一時此著に飽足らぬ情を自身抱いて、印度洋に投じたりの手路も引したが、自己を確立するや、彼は、「これも、自我の解放と進展に一步をふみ出したもの」とゆるし、文學の上からも、「著作の最初から黒潮までのキイノートである」といつた事を此處に附記する。

妻 愛 子

【「思出の記」】（昭和14年・岩波文庫）

あとがき

小説「思出の記」が今秋岩波文庫に増補の生を得た。おもえばやくも三十八年の昔、この小説が初めて國民新聞に掲載されたのは、やはり初秋の風が瀬南の海を許すれた明治三十三年九月の事であつた。私も大體の息子住まいもいつしか四年に及んで、そろそろ恋慕しなくなり、東京は原宿の一隅に、やがて引き移つたが、そこでも夫はせつせつこの稿を書きつづけた。感激や賞讃の手紙は、ほとんど引きれなさに読者から寄せて来て、著者に少なからず力をつけたものであつた。かくて完結後でもない三十三年九月半ばに單行本として世に出た。薄紙五百六十七ページという分厚なもので、定價六拾五錢といふのに見ても、無償さるゝとあり、單純な紙装本で、表紙の上端を薄紙にばかしたのには、それでも私も大體の息子の「わ」むしろ運命がちな現象で、中央に「思出の記」の大きな活字体の四文字がくっきりと印刷されたのを見た時は、私もわが子の誕生を目前にしたような想ひが、いよいよ満ちたさしたものであつた。そして、私も二人の間では「おもひでの記」とはいわず、「シシノ記」「シシノ記」と呼んでゐた。時にまた「デラックス」のコーンパフの紙のようなのを入れたら、おもしろいだろうけれど」などとも話したものである。

この著の世評は無論いほうではなかつたが、さて著者は、年立つほどにその内容や描寫に不満を覚え出し、明治三十九年の朝刊の版に出たころは、その途中で、同業者某の誘得せる同著を「こんなシラメの」を」とばかり、今にわにインド洋にはり込んだりしたものであつた。大正三年「黒い眼と茶色の目」を出すに当たりこの「思出の記」を断絶する機会が来ましたが、彼はまたしても遠慮五條とこの著をのしり断つたにはおなかつた。「おれはもつと苦しんでるぞ」といって「時」が隔つる氣分の相違する許そうとはしなかつた。

彼の後この「思出の記」の「愛讀者が私に告げて「自分はこの書のおかげで青年期の鬱悶を突破して、今日を樂しむたものであるが、現在わが子に、往々自分がなつたやうな苦悶と鬱悶の體驗をなする示唆も機会もないのを、実に遺憾に思つてゐる」と。

右の語から私はふと本書の主人公「菊池太助」に對して、夫が次第に薄りなくなつた氣持の一端を念及した。彼は彼自身の苦悶の深刻味が「菊池太助」そのものに表現されてゐないのが氣に入らぬのに違ひない。幾時當時の彼と、大正三年の彼との間には、約十五年ほどの隔たりがある。感覺のびたり相合はずがなないのが當然である。

私は思う。その當時かりに私もに子を生かたとしても、その成人なりはおそらくこの「菊池太助」がせいぜいではあるまいか。と。彼もこの著をわが子の長子と断絶してゐた。後年（大正三年）の日記の一端にも「読んでゐると一層の眞實（？）氣にわたり込まれて、絶望の切から幾度まで一氣に読み通した」と記し、絶望書の長紙その他に書き散らしたペン文字の

A step though faltering and weak.
In The Evolution of Ego.
Resurrection of Ego.

また This is the keynote of my literary works from the beginning down to "Kokuchō".

などに見ても、その消息の一端がうかがわれる。彼はその前年（大正二年）すでに民友社と絶つてゐたが、本書の編輯やクローズアップなど依然同社から刊行されて、引き続き読者の親しみをうけてゐた。しかし近年ゆえに、幾度か断絶してゐたのを、今回岩波書店の増補で、新たに初版本によつて版を訂し、あらためて読者諸兄にまみゆることとなつた。私は長らく「菊池」の狀態に染じたわが子を、再びわが眼に抱き上げるような喜びを樂しむ得ない。地下の亡夫とともに、定めし同様の感であらう事を信じ、この増補を思ふれた事に對して、心からなる感謝をささげたいと思ふ。

昭和十三年十月、蘆花七十一回忌記念本の秋

妻 愛 子

鵜沼海岸の伸び縮み？

西村 望（会員）

地図で見ると相模湾が一番北まで北上したところに鵜沼海岸がある。太古の昔に遡ると現在の東海道線の近くまで、波が打ち寄せていた時期もあった。

その後、長い時間をかけて砂丘が発達し、時には波に浸食され、現在の鵜沼の土地が形成され、その活動は現在も続いているが、江の島の位置は不変である。

また、別の記録によると関東大震災の際には、このあたりで土地が約 90cm 隆起し、海が後退したとある。

1978（昭和 53）年ころから

一転して、私が引越してきた昭和 53 年頃、片側一車線の国道 134 号線はその海側に駐車スペースになった側道、歩道、松林、さらに、その海側に憩いの広場（小公園）と太陽の広場があり、砂浜との境は高さ数十 cm の盛り土で隔てられていた。

その堤は、なんとか「ここが境界線だとわかる程度まで」破損しており所々にはススキや低木が生えていた。

この土手の低いところを乗り越えて砂浜へ出ると、砂浜との境にはコンクリート製の仕切りがあり 20cm ほどの段差があつた。100m～150m先に波打ち際があり、引き潮のときには更に 50m ほど砂浜が現れ海水に浸かりながら歩いて行ける遠浅の海岸が広がっていた。

海岸には、常設の小田急シーサイドパレス（休憩施設）と東急レストハウスがあり、夏期には多くの海の家が立ち並び、泳ぐところと、サーフィンの場所は白い杭で仕切られており、海岸は大変賑わう。（杭の位置は毎年同じ）

波打ち際は子供たちの絶好な遊び場であり、子供たちと一緒に砂山やトンネルを造ったり、時には子魚を捕まえたり、時のたつのも忘れた。

初夏のころにはアサリの稚貝も採れ、ある年の夏には 2cm くらいに育ったカニの子供が群遊しているのに遭遇したこともあった。

早朝、波打ち際を散歩するとサクラ貝の模様が見られることもあった。ところが、ひとたび台風など嵐に見舞われると海岸線の様子は一変する。時にはひどく

浸食されたり、小さな砂丘があらわれたりする。

1982 年 8 月 1 日には台風 10 号が来襲し多くの海の家が被害に遭い、大波が所々で 134 号線まで達していた。特に三笠会館の所では道路を超えて三笠会館入口まで達していた。また、海岸線も大きく浸食され痩せ細った。

この年は 9 月 12 日にも台風 18 号と台風の当たり年だった。

その対策か 翌年には、引地川河口の堤防が海に向かって延長、かさ上げされた（その後も更に延長かさ上げされた）。その後、海流の関係か砂浜が回復して、現在の姿になったと私は思っている。（素人の考え？）

1982 年は台風が多く来襲したにもかかわらず、鵜沼海岸を訪れる人々は多く日本マクドナルド江の島店が 1 日の売り上げ、さらに 1 月間の売り上げ世界一の記録を達成した。この記録は 1983 年 1984 年と 3 年続けて、更新達成されたとのこと、驚きである。

1990（平成 2）年のころ

1990 年夏季（4 月 29 日から）には、鵜沼海岸一帯で サーフ 90 と称するイベントが催され、海岸の新しい整備事業が動き出した。この頃を境に海岸の様子が大きく変わる。

サーフ 90 は、先に記した憩いの広場のあたりを中心にして、木造のログハウスや、ボードウォークが造られ、展示ブースや店が並び、週末には大道芸やコンサートが催された。10 月 10 日に会期が終わると、一部のボードウォークを残こして きれいに撤去された。

その翌年あたりから、砂浜に現在見られる高さ 6.5m の防潮堤の工事が始まった。引地川の側から順次、江の島の方へ堤防がのびていき、1995 年 3 月に中部地区まで完成した。この防潮堤の工事は、他所から山の土を運びこんで築山を造る一方、砂浜は波打際まで深く掘られコンクリートの構造物が構築されていった。掘った浜の砂は横に積み上げられており、完成後、元に埋め戻されたことが素人眼にも判った。よって、防潮堤は 見えている部分以上に基礎が砂浜の下に隠れている。防潮堤の陸側には、公園や 駐車場などが整備され、現在の姿になった。このスペースは以前より 広くなったようだ。

現在 サーフビレッジの東側にある。平和の像（巨人の像）は、元は憩いの広場の中にあり 1995 年 7 月に移動された。これらの工事と並行して、国道の 4 車線化工事も進んだ。

この際、私が特記したいのは、旧来の殺風景な歩道橋が、新しいデザインの歩道橋に変わったことと、立派な幅の広い石畳の歩道が出来たことであろう。

2003年には人気歌手浜崎あゆみの海の家も開設され、2006年にはビーチバレーのコートが常設化され、サーフビレッジ南側前庭にビーチバレー発祥の地の碑が建立された。

サーフィンは年間つうじて楽しまれており、サーフィンの大会をはじめ多くの海岸スポーツの大会が鵜沼海岸で催されるようになった。

2011年には藤沢市も協賛して“Tube”を呼んで一大イベントも催された。

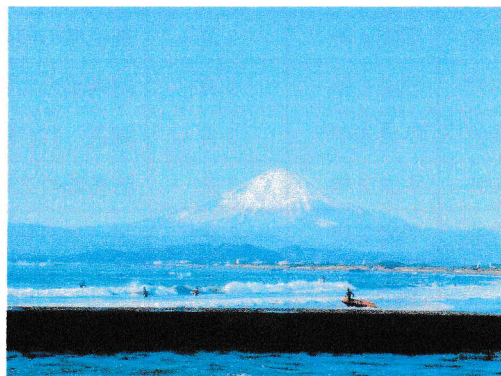
東北大震災の翌年には、防潮堤の上に津波の際の避難タワーが設けられた。

エピローグ

この30年ほどの間に鵜沼海岸は海の方へ伸び、色々な施設が造られ大きく変貌した。波打ち際の様子は日々変わっており、強い南風が吹けば砂がはこばれ一夜にして海岸の様子は変わりサイクリング道路が砂に埋まることもある。



鵜沼海岸からの富士山（夕日）



鵜沼海岸からの富士山（朝日）

鵜沼海岸から見るサンセットは実に美しい。特に夕日が沈んだ直後の富士山のシルエットは最高である。

夕方でもなく、鵜沼海岸から見る富士山は天下一品である。左右の稜線がほぼ対象であり、長く裾野のほうまで延びているのが見える。

富士山を見るポイントは数多くあるが、左右の稜線が対象で下のほうまで見えるのは鵜沼海岸がベストであろう。多くの人々が訪れるこの美しい海岸、景色を末代まで残したいものである。

鵜沼海岸 略年表

西暦	和暦	月日	出来事
1958	昭和 33 年	4 月	海岸道路が 2 級国道 134 号線に昇格する
1982	昭和 57 年	8 月 1 日	台風 10 号来襲 海の家多数半壊
1982	昭和 57 年		マクド江の島店 1 日、1 か月の売上世界一 83, 84 年も
1982	昭和 57 年	9 月 12 日	台風 18 号来襲 追い打ち
1983	昭和 58 年		引地川 堤防延長
1987	昭和 62 年	1 月	白砂青松海岸 百景に入る
1987	昭和 62 年	8 月 9 日	第 1 回ビーチバレー公式大会開催
1987	昭和 62 年	8 月 8 日	台風 11 号来襲 海の家多数被害
1990	平成 2 年	4 月 29 日	10 月 10 日まで サーフ 90 開催
1990	平成 2 年	9 月 30 日	台風 18 号来襲 鵜沼橋が落ちる
1991	平成 3 年	9 月	シーサイドパレスなど撤去
1992	平成 4 年	3 月	鵜沼橋の架替え完成
1993	平成 5 年	9 月	防潮堤の工事始まる
1994	平成 6 年	3 月	国道 134 号線 4 車線化 完成
1995	平成 7 年	3 月	防潮堤の工事 中部地区まで完成
1995	平成 7 年	7 月	ビーチバレーの常設コート 開始
1995	平成 7 年	7 月	平和の像 サーフビレッジ東側 に移転設置
1997	平成 9 年	6 月 29 日	サーフビレッジ 新築完成
2003	平成 15 年	7 月	浜崎あゆみの海の家 鵜沼海岸に
2006	平成 18 年	8 月	ビーチバレー発祥の地の碑 設置 (ビレッジ前庭)
2011	平成 23 年	8 月 27 日	tube コンサート 開催
2012	平成 24 年	5 月	津波避難タワー設置
2013	平成 25 年		

終わりに鵜沼海岸年表の作成にあたり鵜沼公民館資料室の内藤喜嗣氏に協力していただいたことを記し謝意を表します。

(にしむら のぞむ)

路可さんの「聖家族」と「釈迦像」と

山上 英男 (会員)

ふるさとは神奈川県の高沼である。

明治時代の高沼は想像もおよばぬほど閑静な、松原にかこまれた別荘地であった。私の叔母が経営していた「あづまや」という旅館を、自分の家のようにして少年時代を過ごした。

やがて中学に入る時、母が離婚したので、母につれられてあづまやに移り住んだ。

(長谷川路可「随筆サンケイ〈高沼〉」より)

◆ カトリック片瀬教会で

いつの年のことだったか、定年退職後、高沼に住むようになっての、あるクリスマス・イブの前日に境川沿いを夫婦で散歩していた。

たまたまカトリック片瀬教会の前を通ると門扉が大きくあけられていたので、ちょっと中をのぞいた。

祭壇にはプレセピオというのか、馬小屋と聖家族の人形が飾られていた。

入り口のところで立ち働いていたご婦人と高校生のような男の子が「どうぞ中に入って見ていってください」と言った。

まえまえから寺院風屋根の軒下に天草四郎陣中旗のような図柄の十字架がついている白壁の、この和風教会の風貌がおもしろく、いちどは入って見たいと思っていたのだ。

「ありがとうございます」といって、わたしたちは堂内に入った。

わが家でも、この季節には、X'masリースを玄関に飾ったり、アドベントカレンダーを卓上に置いたりしている。

これは、連れ合いが10代の終りまでミッションスクールに通っていたというこ

ともあって、彼女にすれば少々慎み深く飾り付けているのだが、私などは信仰とは無縁な日本のイベントムードの中でこの風景を楽しんでいるに過ぎない。

それでも、こうしてクリスマスをまえに聖堂にはいってみれば、何となく厳かな雰囲気にはたされて、祈りの気持ちがわくから不思議だ。

わたしたちは祭壇に歩み寄った。

壇の両脇は日本式の＜床の間＞で、それぞれ掛け軸がかけられていた。聖書の事蹟を画題にしたものではあったが、日本画なのだ。

「聖家族だね」と右側の掛け軸をさして妻に言った。

泰西名画集などで馴染んできているダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロ等ルネサンス期イタリアの画家が描いた「聖家族」とはまったく画風が違う。

「まるで着色された仏画の阿弥陀三尊図の構図にかようなものを感じるなあ」と感想を述べた。

「やはり日本画独特の画風ね。穏やかで、静かで・・・」と妻が言った。

教会の印刷物の解説を見た。

向かって左の絵は『エジプト避行』、右は『聖家族』とあり、作者は長谷川路可とあった。

作者の名前を知って「ああ、そうなんだ」と、あらためてそれらを見直した。

堂内を見まわせば、祭壇に向かう左右の障子窓の上の白壁に、同じ作者の『十字架の道行き』と題された色紙が十四点、額装されて掲げられていたのである。

画題は、西欧の歴史文化を知るうえで、これまで接してきた読み物や聖書から見知ったもので、わたしにもそれとわかる。

そして作者についても、実はわたしには耳に馴染んでいる名前であったのだ。

しかし妻のほうは、この解説で知った一画家でしかないようだった。

それでわたしは「路可さんは」と親しみをこめて「さん」付けにし、「ほら、前にも話したことがあるけど、東屋の二代目女将の一人息子さんで、水墨画の釈迦像を尼寺の板壁にかいた画家だよ」と教えた。

「ああ、あの話の人ね」と妻も思い出した。

今はその名だけが残る＜東屋＞だが、大正期には作家や画家がさかんに訪れた

有名な旅館で、鵜沼の人ならみな知っている。また、この土地で＜尼寺＞といえ
ば本真寺であることも知っている。我が家の菩提寺でもある。

かつて妻には、墓参りの折などに「中学生のころおばあちゃんに連れられて行
って見た」東屋の路可さんとその釈迦像について話したことはあったのだが、当
時の彼女には関心がなく、またその釈迦像を直接見たわけでもなかったから、記
憶に残らなかったようなのだ。

それが今、この教会の路可作品にゆっくりふれたことで、欠けていたパズルの
ピースがカチッとハマって、認識があらたになったようなのだった。

いい時間が過ごせた。

わたしたちは丁重にお礼を言って、教会を出た。

帰り道に、妻が「クリスチャンの画家が、お釈迦様を描いたというのは珍しい
わね」とぼつりと言ったので、「母親への供養だったと聞いているよ」とむかし
の記憶でこたえた。

◆ 本真寺・釈迦像の記憶

帰宅後、路可さんの釈迦像に出会ったあの日のことをたどりなおしてみた。
もうずいぶん昔だ。

尼寺の庵主（あんじゅ）さんと親しくしていた祖母は、孫のわたしを連れて寺
へ出かけることがよくあった。

わたしが、その人柄を懐かしく思いだすのはショーカイさんとミョーカイさん
である。祖母からの用事を言い付かって訪ねると、お菓子が手渡された。

しかし年齢が進むと、抹香くさい寺は何となく疎遠なものになった。

その上、父の仕事の都合で小学5年の終わりには鎌倉へ引っ越したので、ここ
はさらに間遠い存在となった。ただ、祖父母の暮らしはそのままだったので、お小
遣いをねだりに時々鵜沼へ足を運んだ。

そんなある日、祖母が「お供になっておくれ」と言って、中学生になっていた
わたしを連れて、尼寺さんへ出かけたことがあった。

あれはショーカイさんだったかミョーカイさんだったか、今でははっきりしないが「よく来なすった」と優しい声で迎えてくれた。

庵主さんと祖母との話はながすすむと、わたしに学校の様子などをたずねたあと「きょうは、あなたにいいものを見せてあげましょう。おばあさまといっしょに御覧なさい」と言った。

わたしたちは、本堂に安置された阿弥陀様の祭壇裏へ案内された。

阿弥陀像のちょうど背中あたりになる板壁の前で、庵主さんも祖母も正座した。わたしもしげんに座った。

電灯が点っていたのか、外光がもれてきていたのか、あかるさがほんのり残るその薄暗がりに見たのは、風に向かって歩む白衣のたくましい男性像だった。

祖母が「お釈迦様だよ」とわたしに言った。

その水墨画は一瞬にしてわたしの脳裏にその印象を深く刻んだ。

なぜなら、あの時「これがお釈迦様？」と、意外に思ったことを鮮明に覚えているからだ。

お釈迦様の像といえば、天上天下唯我独尊、右手で天を指し、左手で地を指差したあの甘茶の仏さまではないか……

「これが、ロカさんのお釈迦様です」と庵主さんが言った。

祖母も噂には聞いてはいたが見るのは初めてのようで「これがね」といって頷きさかんに感心する風だった。

続けて庵主さんは「ロカさんがお母様のご供養のために描かれたものですよ。いいおすがたでしょう」とこれはわたしに共感を求めるような言い方で言った。

私は思わず「ハイ」といって、うなずいた。

が、しかし私はロカさんを知らないし、そのロカさんの、この絵がなぜわたしにとって「いいもの」なのか、「見せたいもの」なのか、庵主さんが、そのように言ってくれた心が、実のところわからなかった。

絵の良し悪しについては、なおのことわからなかった。

しかも当時は欧米文化への憧れが強くなっていて、祖母からもらったお小遣いの多くは外映（洋画）に浪費するような年齢だったこともあり、ほとけ様の「い

いおすがた」というのも、腑に落ちてはいなかった。

でも、庵主さんの気持ちに感謝して、うなずいたのだった。

そして、ロカさんとは長谷川路可というこの土地ゆかりの画家だと、あとで知ったのである。

17歳で洗礼を受けた路可さんは、その洗礼名のL u c a s（画家と医者守護聖人であるルカ＝明治の聖書訳語は路加と表記）を雅号にしたという。

彼の生涯の仕事はフレスコで描く、クリスチャンとしての宗教画であった。

そのクリスチャンが釈迦の像を描いた。

なぜだろう。

妻が「珍しいわね」といったことばを、帰宅後、改めて考えてみたのである。

激しい風に白衣をなびかせ歩む釈迦像を記憶の底からひきだした。

たしかに、母親への供養というのがそれを描いたほんらいの動機であり目的であったろう。しかし、それだけだろうか？

フラッシュバックするように向かい風を受ける釈迦像がパッパッとなんども脳裏に浮かんできた。

そのなかから、あの時代に立ち向かっていた路可さんの、その人間精神が描かせたのではないかという思いがふつふつとわいてきたのである。

キリストの愛といい、仏の慈悲という、その精神のむかうところ、路可さんにとってはひとつだったのではないか。

とりわけ、戦争で荒廃したあの戦後の時期、地上に降り立った釈迦は、人々が苦しむ巷へ向かって、向かい風を全身に受けながらも、その愛と慈悲をほどこしてゆく姿でなければならなかったにちがいない。

考えがそこにいたって、わたしはクリスチャンの画家がお釈迦様を描いたもう一つの理由を「そういうことではないかと思うんだ」と、夕食時に妻に話した。

散歩から帰って時間がたっていたから、その話に妻ははじめきょんとしたが、聞いてから「ずいぶんマジメに考えたものね」といって笑った。

◆ ころづくし

マジメついでに、庵主さんがあの日「いいおすがたでしょう」と言ってくれた一言をも考えてみた。

思えば、出来事としてのあの日のことは忘れてはいなかったが、また何年か前にはこの釈迦像保存修理のための寄付に応じたこともあったが、それはそれだけのこととして済んでしまっていた。

いわば肝心なところで内面の発酵がすすまなかったようなのだ。

それが、片瀬教会に立ち寄ったことから、「聖家族」を媒介に、本真寺の「釈迦像」へと思いめぐり、わたしの発酵がはじまり、いろいろな思いがわきあがってきたのである。

その中に、あの日わざわざ中学生のわたしに、あの絵への関心をむけるように言葉をかけてくれた庵主さんの行為の意味が見えてきたのだ。

あれは本物を・・・描かれて間もない湯気の立つような本物を、若い魂にじかに触れさせようとした庵主さんのころづくしだったのではないだろうか。

「いいものを見る」とは、そういうことではないか。

あれから半世紀以上もたつ。今頃気づくとは、ぼんくらだねえ。

懐かしさにつつまれながら「いいおすがた」の釈迦像を、機会があれば今度は妻とふたりで見ようと思った。

(やまかみ ひでお)

「藤沢の巨樹めぐり」プロジェクトを終えて

佐藤 弘（会員）

平成23年3月6日からスタートし、6回の下見調査を経て「藤沢の巨樹めぐり」選抜編としての調査を平成25年12月17日に行ない、多数の会員参加の調査でプロジェクトは終了したので、ここに全体を通しての報告をする。

このプロジェクトのきっかけは、鈴木三男吉会員が巨樹を調査してはどうかという提案から会としての事業計画として取り組んだ。

調査方法および範囲等を論議した結果、鶴沼の巨樹を知る為に藤沢市全域に拡大することになった。調査は2002年3月藤沢市教育委員会発行「藤沢の文化財」－樹木を訪ねて－を基に、現状がどうなっているかを主体にした。幹周りの大きさ測定は当時の測定位置との誤差も考えられるため省略した。人数、時間他諸々の事情を考慮し、希望者による下見を数回行ない、最後に締めを行なうこととした。

具体的な場所は市内全域で困難が予測されたが、高橋会員の事前調査および案内により円滑に訪ねることができた。また、地域を区切り効率的に6回に分けての下見会は会員の車に分乗することで快適に郊外ドライブを兼ねた小旅行気分を味わうこともできた。調査時期は樹木を探し易い時期、即ち周りの樹々の葉が繁茂していない時を選んだ。

下見会	H23年 3月 6日	大庭、六会、御所見、藤沢	会誌106号参照
	H24年 4月17日	六会、長後	会誌106号参照
	H24年 5月22日	六会、藤沢	会誌106号参照
	H24年11月20日	大庭、鶴沼、藤沢、村岡	会誌106号参照
	H25年 6月18日	藤沢、鶴沼、片瀬	会誌107号参照
	H25年 9月10日	江の島	会誌107号参照
選抜編	H25年12月17日	市内全域	会誌本号別掲載

今回の調査で観察した巨樹の周辺には、本には記載されていないが測定すると幹周り3メートルを超える所謂巨樹に相当するものも散見された。過去の調査もれ、若しくはその後の成長で巨樹の仲間入りしたのかもしれない。巨樹は過去からのかけがえの無い貴重な遺産であり、短期間に生み出せるものではないため、出来るだけ多くの樹木が引継がれて行くことを願ってやまない。

「藤沢の巨樹めぐり」調査まとめ

巨樹全体の調査を数値的に色々な切り口でまとめた。

〔現存本数〕

86本 ← 93本（2002年3月藤沢市教育委員会発行「藤沢の文化財」

—樹木を訪ねて—記載の本数より）

7本消失している。内訳は、個人宅3軒3本、神社仏閣4ヶ所4本であるが、傾向的なものはない。理由は個々に異なっているが、朽ちてきた、建物を建てるのに邪魔、土地を整備するため、等の情報であった。

〔樹種〕

タブノキ	25本（内8本は皇大神宮にある）
イチョウ	23本
クスノキ	13本
スダジイ	12本
ケヤキ	5本
ムクノキ	3本

アメリカキササゲ、カヤ、サワラ、シラカシ、ハリギリ各1本

〔存在場所〕

東海道線以北	71本
以南	15本
神社仏閣墓地	68本
個人宅	13本（12軒）
学校	5本

集中して多い場所

皇大神宮	11本（タブノキ8本、ケヤキ、ムクノキ、イチョウ）
遊行寺	6本（イチョウ2本、スダジイ2本、クスノキ2本）
常光寺	6本（タブノキ2本、クスノキ2本、カヤ、イチョウ）
江島神社	6本（タブノキ3本、イチョウ2本、スダジイ）

〔鵜沼地区〕（写真参照）

皇大神宮	11本（上記）
湘南高校	2本（クスノキ）
個人宅5ヶ所	本鵜沼関根家（鵜沼小信号東） クスノキ

本鵜沼中原稲荷	タブノキ
本鵜沼斉藤家（旧家）	ケヤキ
本鵜沼関根家（警察署近く）	タブノキ
鵜沼石上宮沢家（江の電石上駅南）	タブノキ

〔選抜した巨樹〕

藤沢の巨樹とはどのようなものなのかが短時間の体験で理解出来るような巨樹を選んでみた。すなわち、どのくらいの大きさの樹なのか、樹の種類はどのようなものなのか、地域としての特徴は等々を考慮して選んだ。

場所としては5カ所であるが、それらを見ることにより藤沢全域と鵜沼の巨樹のイメージが把握できると思う。

選んだ巨樹（次ページ以降のリストに◎を付記）

遊行寺のイチョウ	巨樹 1 位	樹種別 1 位	市指定文化財	写真 1
常光寺のイチョウ	巨樹 2 位	樹種別 2 位	市指定文化財	写真 2
臺谷戸稲荷のタブノキ	巨樹 3 位	樹種別 1 位	市指定文化財	写真 3
葛原の田中家のスダジイ	巨樹 4 位	樹種別 1 位	市指定文化財	写真 4
常光寺のカヤ	巨樹 2 位	樹種別 1 位	市指定文化財	写真 5
皇大神宮のタブノキ	巨樹 6 位	樹種別 2 位	市指定文化財	写真 6
葛原の田中家のスダジイ	巨樹 7 位	樹種別 2 位		写真 4

実際にH25年12月17日、多くの会員の参加により調査した。当日の記録は別掲の岡田会員の内容を参照されたい。

あらためてこれまでの調査結果を次ページ以降に一覧表としてまとめた。藤沢市の全巨樹を地域毎にくくり、場所が分かりやすいように補足説明したリストと樹影写真（一部）とを初めての人が訪ねる時の参考になるようにした。

最後に、写真撮影、車の提供、事前調査に協力していただいた会員にあらためて感謝します。

（さとう ひろし）

〔参考文献〕2002年3月藤沢市教育委員会発行「藤沢の文化財」-樹木を訪ねて-
会誌『鵜沼』106号、107号

藤沢市の巨樹一覧

注) 幹廻りは学術調査目的ではないため、藤沢市教育委員会発行の

「藤沢の文化財」の当時の数値を転記した。また、掲載順も合わせた。

地域	選 抜	場所	樹種	幹廻 り m	補足説明	写真 No.
御所見		寒川社	ハリギリ	3.30	用田739、用田市民の家近くにある神社、樹は林の奥のため見つけ難い、葉の形が特徴的、見分ける目安となる、樹種別市内一位	7
		寿昌寺	イチョウ	3.89	用田2224、山門手前に左右あるうちの向かって左側	
		大貫家	クスノキ	3.17	葛原366、表門から家越しに見え、二階の屋根より高く聳える	
	◎	田中家	スダジイ A	5.50	葛原1143、葛原の信号に隣接する家、太い方、かなり朽ちかけてはいるが、圧巻である、樹種別市内一位	4
	◎		スダジイ B	4.94	細い方、屋敷の裏側にある、2本隣り合っている、50年前は現在の3倍程の高さがあったとのこと	
		皇子大神	サワラ	3.16	葛原1382、滝不動の道路をはさんで北側、大鳥居の西脇、樹種別市内一位	8
		滝不動	イチョウ	3.21	葛原1917、『滝のお山』と呼ばれた面影が感じられる所	
		豊受大神	クスノキ	3.17	葛蒲沢625、県道22号宮の腰交差点南西角の神社境内	
		森家	タブノキ	3.33	打戻2516、御所見ロイヤルテニスクラブ敷地内コート西南に接したフェンス脇、整枝されている	
		宇都母知神社	スダジイ	3.06	打戻2661、広がった枝の下側に椿が植わっている、樹齢300年?	
長後		井上家	スダジイ	3.19	下土棚462、長後駅南東に隣接する屋敷の旧県道側	
		白山大神	イチョウ	3.64	下土棚1065、社殿前面脇、かなり枝を切られている	
		竜泉寺	イチョウ	3.90	長後968、長後小学校北方、本堂前の中央にあり、長後で一番	9
		福島家	シラカシ	3.00	長後1502、県道42号長後橋北東200m、天満宮南200m、民家の裏庭、裏側から見た方が大きさが分る、樹種別市内一位	10
		諏訪神社	スダジイ A	3.58	高倉2674、県道42号高鎌橋交差点北300mの神社 境内の東南	
			スダジイ B	3.28	社殿左、御輿倉の裏	

地域	選 抜	場所	樹種	幹廻 り m	補足説明	写真 No.
六会		加藤家	タブノキ	3.11	亀井野205、国道467号法泉寺歩道橋東150m、整枝されている、個人宅の裏、奥のほうにあり、道路からは見えない	
		青木家	スダジイ	3.46	亀井野267、国道467号六会交差点東50m広い農家の庭先、玄関近くにある、高さは高くないが、横張りがかかなり大きい巨樹	11
		法泉寺	イチヨウ	3.49	亀井野391、国道467号法泉寺歩道橋西30m	
		六会小学校	イチヨウ	3.36	亀井野550、県道43号不動前交差点東100mグラウンド西南隅	
			アメリカキササゲ	3.15	珍しい巨樹、グラウンド北側の西寄り、滑り台近く、樹種別市内一位	12
		亀井神社	イチヨウ	3.22	亀井野554、六会小学校の東隣、近づくとき意外と太い	
		雲昌寺	イチヨウ	3.45	亀井野1457、国道467号六会交差点東100m、本堂左奥	
			クスノキ	3.24	本堂右奥	
			ケヤキ	3.00	本堂北側	
		御嶽神社	イチヨウ	なし	西俣野1891、県道403号ランド入口交差点南600m、改築時伐採	
大庭	◎	臺谷戸 稲荷の森	タブノキA	5.51	大庭1809、主幹が折損している、高くはない、巨樹3位、樹種別市内一位、市指定文化財天然記念物	3
			タブノキB	3.09	こちらも主幹が折損している、高くはない、市指定文化財天然記念物	13
		宗賢院	クスノキA	3.53	大庭1-8-1、山門左脇、高さも高い	
			クスノキB	3.07	境内中央、一段高い墓地の東の肩部にある、こちらも立派	
		三髯家	ケヤキ	なし	羽鳥3-15-5、門前広場に伐採された幹が展示	
		鈴木家	ケヤキ	なし	羽鳥3-21-10、現在は痕跡もない	

地域	選 抜	場所	樹種	幹廻 り m	補足説明	写真 No.
藤沢	◎	白山神社	ムクノキ	3.51	藤沢676先、社の左右にあり、2本とも大枝が伐採されている	
			イチョウ	3.43	下の段には巨樹と思われる大きな切り株がある	
		立石神社	イチョウ	3.25	藤沢3182、国道467号立石2丁目の交差点の東方500m、社殿の傍らに立つ、バランスが良い	
		体育センター	クスノキ	3.56	善行7-1-1、善行最大の巨木、幹が4本に分枝されている、大きなクスノキが数多く近くにある	
		白旗神社	ケヤキ	3.22	藤沢2-4-7、参道の石段を上り、次の石段手前左手奥の急斜面の際	
		藤沢小学校隣墓地	ムクノキ	3.42	本町1-2、小学校東に隣接する社の横を西に入って30メートル、特徴的な枝振りで高く大きい	
		平野家	イチョウ	3.22	本町1-12、平野家の墓地の一角	
		◎ ◎ (境内に配置図ある)	常光寺 イチョウ	5.86	本町4-5-21、裏山西側中腹、樹種別市内二位、神奈川県銘木100選の一つ、市指定文化財天然記念物	2
			カヤ	5.37	左手墓地中央、樹種別市内一位、神奈川県銘木100選の一つ、市指定文化財天然記念物	5
			タブノキA	3.97	上記近く、市指定文化財天然記念物	14
			タブノキB	3.94	半分朽ちている、新しい枝も伸びている、市指定文化財天然記念物	15
			クスノキA	3.12	山門を入ってすぐの左右の樹、市指定文化財天然記念物	16
			クスノキB	3.04	山門を入ってすぐの左右の樹、市指定文化財天然記念物	
			永勝寺 イチョウ	3.56	本町4-4-15、山門に入って左手、姿が良い	17
			イチョウ	3.12	山門に入って右手（左手に比べ細い）、こちらも姿が良い	
		おしやぐじ稲荷	タブノキ	3.39	本町4-8-2、南仲通4丁目会館（本六会館）県立藤沢高校正門左、かなり切り詰められている	
		真浄院	イチョウ	3.47	遊行寺山門左手の寺、門を入り右	
	◎	遊行寺	大イチョウA	6.83	境内広場の中央に位置し、とにかく大きい、高さ巾いずれも立派、市内一位	1
			イチョウB	3.27	境内広場の東寄りに位置する、似た大きさのイチョウが近くにある	

地域	選 抜	場所	樹種	幹廻 り m	補足説明	写真 No.
藤沢		遊行寺	ムクノキ	なし	裏手の山腹にあったが、今はない	
			クスノキ A	3.74	東側墓地の中程、樹種別市内一位	18
			クスノキ B	3.53	墓地の国道に近い側にある	
			スダジイ A	3.60	北側にある裏山の中、同定はできない	
			スダジイ B	3.12	林の中に入ることが出来ず断念	
		大鋸稲荷	ケヤキ	3.42	大鋸2-5、藤沢団地の一角、3号棟西側急斜面の崖上	
村岡		宮前	タブノキ	4.91	宮前560、鳥居をくぐって右手	
		御霊神社	スダジイ	3.01	裏山を登って右手の水平道を行き左手、白の標識から南の位置	
		二伝寺	タブノキ A	3.68	渡内543、東側山腹を覆う大木、少し朽ちている	
			タブノキ B	3.31	寺に向かって左山足にある	
		小池家	ケヤキ	なし	柄沢220、新しく造成された土地に変わっている	
		柄沢神社	タブノキ	なし	柄沢488先、新しく造成された土地に変わっている	
鶴沼	◎	皇大神宮	タブノキ A	5.17	社務所に向かって左、高さより横への張りが大きい	6
	◎		タブノキ B	4.72	鳥居向かって左の銀杏の裏	
	タブノキ C		4.08	渡り廊下の奥（裏）		
	タブノキ D		3.35	境内東北の道路端近く		
	タブノキ E		3.32	この神社で8番目に太い樹		
	タブノキ F		3.16	境内北西の端近く		
	タブノキ G		3.10	鎮守の森を構成する一本		
	タブノキ H		3.06	タブノキBの西10メートル		
	ケヤキ		3.86	境内東北の道路角近く、羽鳥三賢家のケヤキが無いため樹種別市内一位	19	
	ムクノキ		3.39	落葉高木、葉の形を目安に探す		

地域	選 抜	場所	樹種	幹廻 り m	補足説明	写真 No.
鶴沼		皇大神宮	イチョウ	3.36	鳥居の向かって右奥	
		湘南高校	クスノキA	3.60	鶴沼神明、正門入ってすぐ右手、 樹種別市内二位	20
			クスノキB	3.06	正門入ってすぐ左手	
		関根家	クスノキ	3.28	本鶴沼2-5、県道30号線鶴沼小学校 入口信号を東側に50メートル、大 東町内会館の向かい側	21
		中原稲荷	タブノキ	3.50	本鶴沼2-16-6、本鶴沼駅から藤沢 警察署への道沿い	22
		斉藤家	ケヤキ	3.83	本鶴沼5-10-35、鶴小近くの旧家、 裏側の道路から頭部が見える	23
		関根家	タブノキ	3.00	本鶴沼5-13-15、トヨタの販売店の 隣、道路から見える	24
		宮沢家	タブノキ	3.01	鶴沼石上3-1-23、江の電線路に沿 った個人宅の道路側にある、他に 大きなタブノキ、ケヤキ他もある	25
片瀬・ 江ノ島		本蓮寺	イチョウ	4.58	片瀬3-4-41、山門を入れて右側の 双幹の大木、手入れの行き届いた 美しい庭、歴史ある寺	26
		竜口寺	タブノキ	3.70	片瀬3-13-37、仁王門の石段を上が った山門の脇	
			イチョウ	3.14	仁王門に向かって左手	
		江島神社	スダジイ	3.49	辺津宮、江ノ島では二番目に太い	
			イチョウ	3.22	辺津宮、奉安殿の先、八坂神社と 並ぶ秋葉社の参道をへだてて向か いに側にある太い方の樹	
			タブノキA	3.97	中津宮、社殿正面石段下左手道脇 にあり、辺津宮からは金亀楼跡を 過ぎると行く手に立ちはだかる、 島一番の巨樹である	27
			タブノキB	3.44	中津宮、上記タブノキから石段を 隔てて反対側崖の上に茂る	
			イチョウ	なし	中津宮三つ目のエスカー入口左手 に痕跡がある、幹は40～50センチ 程に切断されたものに姿をかえ、 腰掛けになっている	
			タブノキ	3.23	東斜面、島の東側の急斜面、女性 センター裏から見上げる崖の上、 近づくことはできない	
			イチョウ	3.31	奥津宮、奥津宮社殿とお手洗い所 の間	



写真1

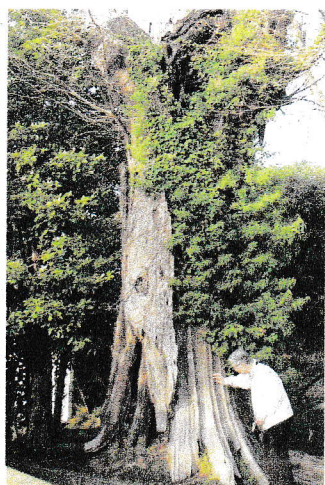


写真2



写真3



写真4

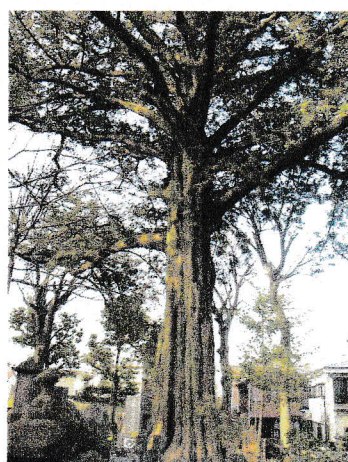


写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10

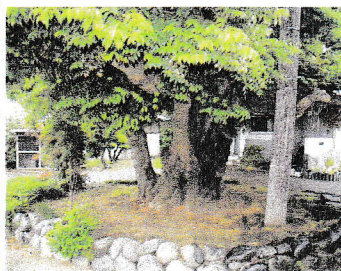


写真11

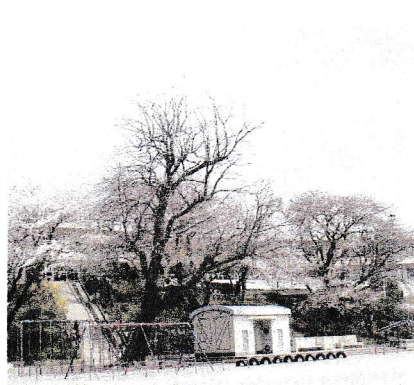


写真12

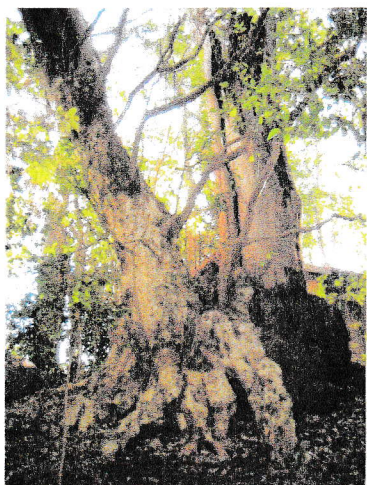


写真13



写真14

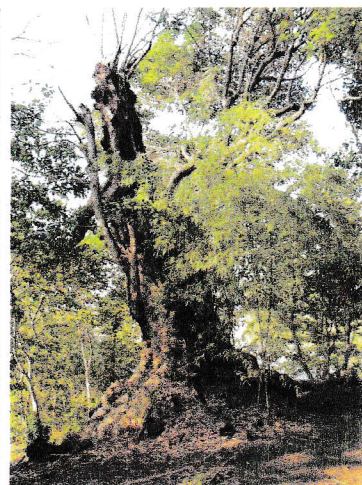


写真15



写真16



写真17



写真18



写真19

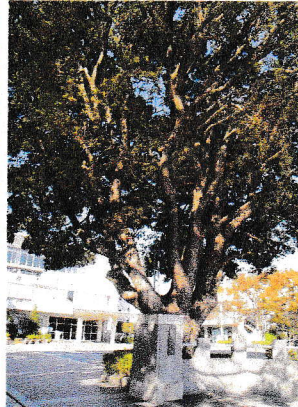


写真20

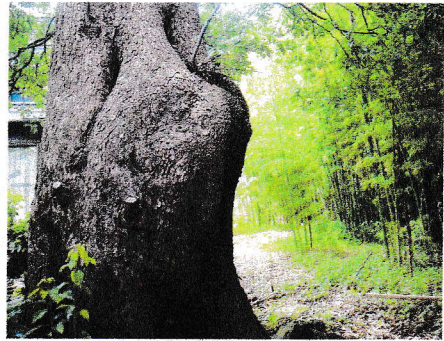


写真21



写真22



写真23

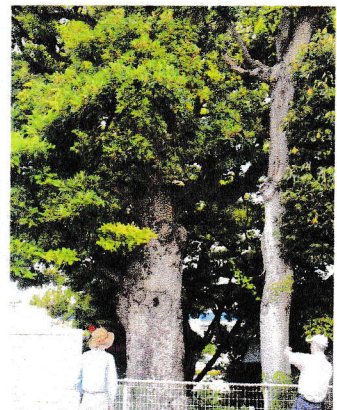


写真24



写真25

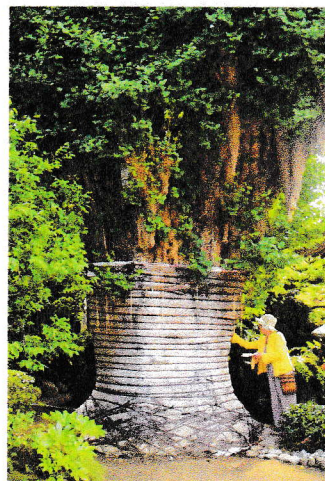


写真26

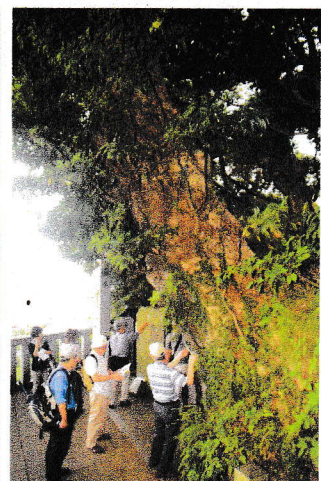


写真27

(写真：竹内広弥/高橋博明)

選りすぐりの巨樹をみる

岡田哲明（会員）

一昨年来、継続調査の「藤沢の巨樹めぐり」は、地域を分けて順次現状調査が行われていたが、江の島を最後に全調査を完了した。

そこで、なかでも特筆すべき立派な巨樹を選抜し、それらを“一日コース”で見学する企画がたてられ、「藤沢の巨樹めぐり」選抜編として例会で呼びかけて参加希望者を募り、2013年12月17日に実施された。

さいわい当日の天候は晴、無風温暖。参加者は女性5名、男性9名の計14名、3台の車に分乗して鵜沼公民館前を午前10時に出発した。

まず訪れたのが臺谷戸稲荷の森。ここは市街化調整区域であり、貴重な自然が残っている里山で稲荷の社は小さいが、そこにあるタブノキは市内随一の巨木で樹齢何百年とも知れず、得も言われぬ風格があって圧倒される。

そこからほど近い藤沢市立大庭台墓園内の鈴木三男吉さんのお墓へ行く。鈴木さんはこの「藤沢の巨樹調査」の発案者であり調査中に他界された。それで調査完了報告を兼ねてお参りに寄ったのである。献花、参加者記念撮影。

次に訪れたのは葛原の田中家、旧家の敷地内にあるスダジイである。家人の了解を得て裏側から敷地内に入る、といっても門塀で仕切ってあるわけでもなく、おおらかなものだ。スダジイは2本が根元で一体になったように見える。よほど長い年月の風雪に耐えて来たものとみえて曲がりくねり、ヤドリギが寄生しているが、いまだに結実しシイノミを地面に散り敷いていて、これも貫禄がある。

車は東にむかい国道467号線へ出て南下、デニーズ六会に立ち寄り昼食。さらに南下して国道1号線に入り遊行寺の駐車場へ乗り入れるのに脇参道のスロープを上る。眼の前に黄葉を残した大イチョウが屹立している。かつては樹高30mを超していたが昭和57年8月の台風で上半分を折損した。そのころの痛々しい姿を知っているだけに、この回復ぶりには感動した、実に見事な堂々とした姿を取り戻している。鎌倉鶴岡八幡宮のイチョウも2010年台風被害で倒れ、根元から切断されたが残った根から若木が芽吹き、丈が1.2mほどに育っているという。

イチョウは生きた化石と呼ばれるほど古い植物である。現在までその種を維持してきたのは、この並はずれて強靱な生命力によるものであろう。

本堂の裏の墓地へ行くと右手に大きなクスノキがある。クスノキでは市内ナンバーワンという巨樹だそうだがロケーションが悪く、全容を見難いのが残念だ。

藤沢橋を西へ旧東海道の街道を少し行くと左側、消防署の脇を入ると常光寺である。ここには詩人野口米次郎の墓があり、その設計者は息子のイサム・ノグチである。イサム・ノグチといえば広島原爆慰霊碑や平和大橋のデザインで、また、まるい和紙の照明器具で、それよりも山口淑子と結婚した事で知られる。

余談だが、彼は少年時代茅ヶ崎で育った。常光寺の住職は親戚である。

本題に戻ろう。常光寺にはカヤのすばらしい巨木がある。ちょっと赤みがかった灰色の幹がまっすぐ天に向かって伸びている。最上の碁盤、将棋盤はカヤで作られる。カヤは弾力があって復元力が強く、石や駒を打据えても肩が凝らないし微小な疵が付いても元に戻るのだそうだ。このカヤから何面の盤が取れるかと想像しながら見上げる。ふと足元に目をやるとカヤの実が落ちている。北原白秋作詞、山田耕筰作曲の童謡「かやの木山の」が思い出される。

かやの木山の かやの実は いつかこぼれて ひろわれて
山家のお婆さは いろいろ端 粗朶たき柴たき あかりつけ
かやの実かやの実 それはぜた 今夜も雨だろ もう寝よよ
お猿が啼くだで 早よお寝よ

小声で歌いながら墓地の方へ行くと、中がすっかり空洞になったイチョウの古木がある。雷に打たれたようで空洞の内側が黒く焦げ、枝葉に勢いもなく、遊行寺に次ぐ太さのイチョウなのだが痛々しい姿だ。

そこから鵜沼皇大神宮へ。鵜沼皇大神宮はさすが土甘郷の鎮守、1200年の歴史を持つだけに境内にはタブノキ8本、ケヤキ、ムクノキ、イチョウ各1本がリストアップされている。参道から本殿までの整然とした構えに反して、本殿の左右と裏側は自然の雑木林のようなたたずまい、本殿の周囲はなだらかに斜面が下っていて、ほんの小高い場所をえらんで造営されたものと知れる。目的の巨樹は、もっぱらこの自然地域にあったが、どういう訳か、心に響くほどの巨樹がない。

私は、臺谷戸のタブノキ、田中家のスダジイ、遊行寺のイチョウを三大名巨樹と位置付けたいと思った。

以上で「藤沢の巨樹めぐり」選抜編は終了し、また公民館前まで戻って解散となった。車を出し運転して下さった有田会長、佐藤弘、西野賢二両会員および案内役の佐藤弘、高橋両会員には感謝々々。ご同行の皆さまもお疲れ様でした。

(おかだ てつあき)

櫨の木 回想

～かつて賢者たちがその下に集まった～

森岡 澄（会員）

藤沢の巨樹ベスト八十六のなかに唯一、長後・福島家のシラカシがあった。櫨の巨木というのは、そう多くあるものではないし、櫨の木には特別の思い出があった僕だったから、巨樹めぐり開始前から、期待と共にイメージが先行していた。

福島家はまだ農道の面影を残す路に面して屋敷入口脇に作業小屋と野菜直売所が設けられていて早目の夏野菜が並んでいた。

広い庭を突っ切って畠につづくならかな傾斜地に目的の櫨の木は高く枝を広げていた。その太い幹には、農具としての竹竿や丸太、梯子などが寄せ掛けられてあり、雄姿を眺めるには少々妨げになるなどというのは、たまに訪れた他所者の我が儘というものだ。

四方から眺め「ここに薙を敷いて昼めし」…などと勝手な想像をめぐらせていた僕に「夏、樹間を通ってくる風は涼しいですよ」と身内を愛で褒めるかのような御主人の言葉が印象的だった。

大庭・宗賢院のクスノキからスタートしてそれぞれの巨樹は自らの生存条件を切り開き、そこにそうして在った。それらの巨樹の半数は生と死を同時に内包しながらゆるぎなくそこに立っていた。僕はもっとそれらの樹と向き合っていたいと思った。

かりそめに通りすぎて

十分に愛さなかった かずかずの場所への郷愁よ

それらの場所へ遠方から 何と私は与えたいことか

仕忘れていた身ぶりを、つぐないの行いを

もう一度——今度はひとりで——あの旅を静かにやり直したい

あの泉のところに もっと永くとどまっていたい

あの樹にさわりたい、あのベンチを愛撫したい…

リルケの詩と共にスペイン遊学の際、最後の旅となったバスク地方ゲルニカの

櫟の木を訪ねたときを僕は反芻していた。

[1999 年：スペイン日記から]

議事堂はシンボルとなる櫟の木とともに小高い丘の上に建っていた。バスクの古い伝統では共同体の利害に係る諸問題は櫟の木の下に集い民主的に決めることになっていた。そしていつしかゲルニカの櫟の木がもっとも重要な木になっていた。ビスカヤ県の法律が 1876 年にゲルニカの櫟の木の下で起草されて以来、長老指導者たちは、この聖なる木の下で誓いを立てることが恒例となっていた。

1936 年 10 月に共和国政府はバスク自治法を採択した。バスク政府の新大統領に就任したホセ・アントニオ・アギーレは、ゲルニカの櫟の木の下で就任式をあげたのであった。

同年 7 月にはフランコ将軍のクーデターからスペイン戦争が勃発していた。1937 年 4 月 26 日月曜日、市（いち）の立つ日、フランコの要請を受けたナチス・ドイツ空軍がゲルニカを無差別爆撃し、それが戦略爆撃という概念を導き、すぐ先に広島、長崎への原爆攻撃が待っていたことは、すでに歴史的事実だ。

市（いち）も終りかけた午後 4 時半サンタ・マリア教会の鐘が空襲警報の合図でたて続けて三度打ち鳴らされた。

彼らの攻撃は未曾有の残酷さで無防備な一般市民を対象に三段階に分け



EL CASA DE FANTOS cercano

て行われたという。以上のゲルニカ爆撃の一端だけを頭に入れた僕たち夫婦はバスクの聖域に向かった。丘の上に やゝ小規模ながら石造りのいかにも風格のある建物があつた。カサ・デ・ファントスと呼ばれる議事堂である。天井まで吹き抜けの議事堂は議員の討議の場だけでなくミサを行う礼拝堂を兼ねていた。

目指す自治のシンボルである櫟の木は議事堂脇の柱廊前に豊かに葉を繁らせていた。この櫟の木は何代目かのまだ若いものであつて、最も古い記録によると1334年には、すでに齢を経た櫟の木がそこにあつたという。1808年フランス軍によって切り倒され、その後に植え直されたものもマドリードから来た将軍によって切り倒されたという。倒されても倒されても…枯れた櫟の古木の残幹が天蓋付きの石造の円柱によって丸く囲まれ、さらに鉄柵がめぐらされて保存されている。エスパーニャ諸王の署名のあるバスク自治権尊重についての宣誓文のプレートとともに。

若いマエストラに引率されて十数人の生徒がメモをとったり、スケッチをしている僕を取り囲んだり、古木の一部を指して「de una bala—！」と叫んでいる…弾痕を見つけたのだ。僕は若い櫟の幹に手を置き別れを告げた。

「何かお祈りしたの？」

「もう人間どもの悪にくみに会いませんように…」

「折角バスクまで来たのだから文化的なこととして行きましょうよ」

という妻の提案でフランス国境に近い美しい入江の町サン・セバスチャンでバスク料理に感心してビルバオにオープンしたグッゲンハイム美術館を見に行くことにした。

* * *

鈴木三男吉さんと櫟の木、そして巨樹めぐりは、僕に多くの知恵を授けてくれ計り知れない物語りを聞かせてくれた。人生の秋を迎えた今こそ、過去を懐かしむのみではなく、未来を考えなければならない時期だ。樹と老人の対話は格好の主題ではないか、今こうして原稿に向かっている僕は人間ではなく樹に寄り添っている。

(もりおか きよし：絵も筆者)

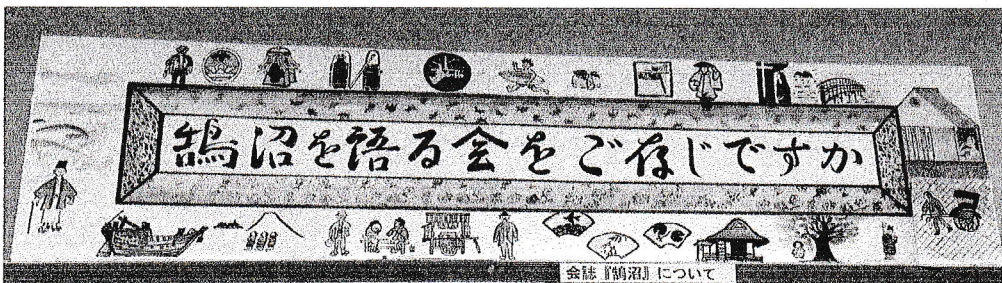
[事業報告]

第 37 回 鵜沼地区公民館まつり展示部門参加

「鵜沼を語る会をご存知ですか」

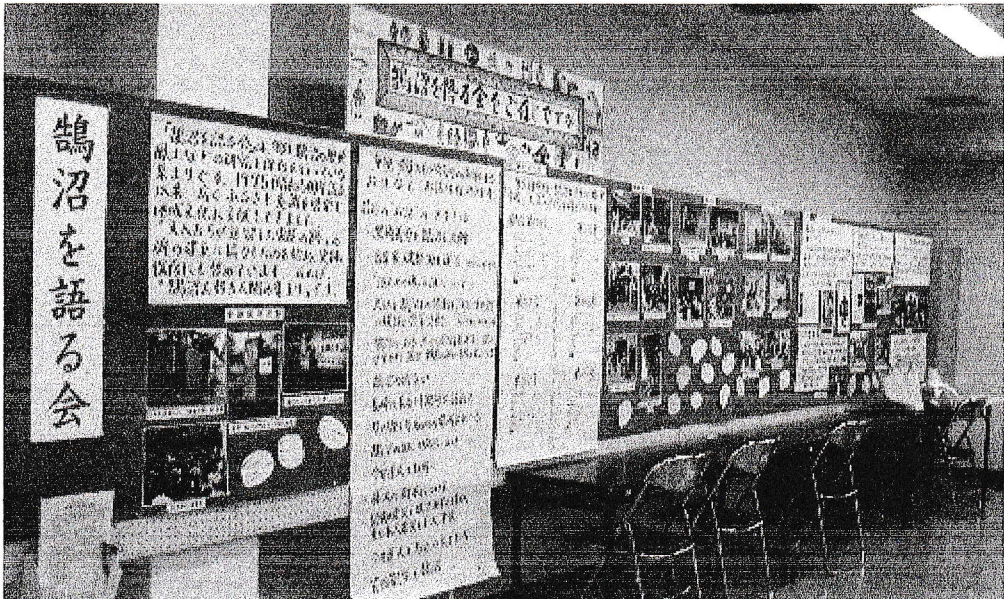
第 37 回鵜沼公民館まつりは平成 25 年 10 月 19 日、20 日の両日にわたって開催されました。今回の展示は、公民館まつりに訪れた一般の方々向けに、『鵜沼を語る会』をご存知ですか、というタイトルで会の紹介をしました。

模造紙に直接マーカーで書き込むという壁新聞スタイルで親しみやすさを演出、タイトルパネルは森岡さんが作成した作品です。



10 月例会時に出席の会員に書いていただいた会の紹介文や会に対する感想・思いなどを色紙（いろがみ）にプリントして壁面の余白に貼りつけました。その内容をここに紹介します。

- *鵜沼をもっと知りたくなる会です。
- *鵜沼が大好き！ 鵜沼の歴史を勉強し良き鵜沼の緑を守り先人の残した文化を残したい。
- *語る会に入会して思うこと・・・人生は残高でなく振り幅だ！ と思うようになった。
- *歴史を知りたい、先人のお話を聞きたい。
- *鵜沼住人のこの地を愛する気持ちの深さに圧倒される思いで、毎月の例会を楽しみにしております。
- *春風が吹くと桶屋がもうかる、この会に入ると鵜沼が好きになる。
- *鵜沼の光る海は外国にいても思い出し望郷に涙することもありました。
- *ただ、ぼんやりと鵜沼に住んでいるのも鵜沼らしくて良いけれど‘語る会’のようなものがある方が“鵜沼で暮らす”という事の意味をはっきり認識出来てよい。



- *鵜沼のことをいろいろ知り学ぶことができました、それらをベースにこれからの鵜沼をより良いまちへ緑豊かなまちへとなるよう努めます。
- *潮の香りのする鵜沼の昔と今と未来を語ろう。
- *知らなかった事を教えていただける楽しい会です。
- *今井達夫を追いかけて鵜沼にたどりつきました。知れば知る程鵜沼と馬込文士村のご縁の深さにおどろいています。
- *生活の一部になっています。いろいろなことを教えられました。仕事をわすれるひとときです。
- *鵜沼を知るには辻堂元町、鎌倉の歴史を知ると見えてくるものがある。
- *鵜沼ってどんなところ？ 昔は今は？ 自然！ 歴史！ 文化人あふれるこのすばらしい地、いつでもどこでも来て聞いて見て知って学んで調べて楽しむ会です。
- *豊かな鵜沼の郷土歴史を皆さんと一緒にひもといて行きましょう、楽しく語り合ひましょう。
- *鵜沼は魅力あふれるところ、好きです！ 多くの先人達が残した緑豊かな環境と豊かな文化を守り後世に残したい。
- *鵜沼について昔のことを知りたかった。語れなくても聞くだけでなく協力できることはあります、自分の特長を活かそうではありませんか。
- *鵜沼大好き人間の集まりです。

(記：柴田薫子)

〔事業報告〕

「総合ミュージアムを語ろう」展に出展参加 『芥川龍之介と鶴沼とのかかわり』をテーマに

2013年11月19日～24日、藤沢市市民ギャラリー第一展示室で第5回「総合ミュージアムを語ろう」展が開催された。主催は「藤沢文化創造の丘をすすめる会」（熊坂兌子会長）。展示主旨は「42万の人口を有する藤沢市に公立のミュージアムが無く、貴重な資料、美術品などが収納出来ず離散状態にある。次世代への文化継承のために良い方策はないか…」を訴えるものであった。熊坂会長は「鶴沼を語る会」の会員でもあり、昨年8月例会で当会へ出展参加を要望された。自然科学系、人文系、美術系の3分野からの出展で「鶴沼を語る会」は、人文系での出展ということであった。

「総合ミュージアムを語ろう」展の展示主旨に照らし、当会独自の資料を基に展示できるテーマを探った。市民ギャラリーで6日間の展示となれば来場者もかなりの数が予想される。少しでも市民が興味を持つ展示内容を念頭に、



コの字型の展示コーナーを効果的に活用

鶴沼で晩年を過ごした芥川龍之介にスポットを当てた。

「鶴沼を語る会」では長年にわたり、芥川龍之介について多くの会員が研究・調査し、当会ならではの資料が蓄積されている。「芥川龍之介と鶴沼とのかかわり」をテーマとしたものは好評だった展示実績もあり、それを基に今回の展示資料を作成した。龍之介にとって短い鶴沼時代ではあったが十指におよぶ作品を書き上げている。そのうち4作品は鶴沼を舞台にしたもので、龍之介の「末期の眼」が捉えた鶴沼の重要な光景のひとつとなっている。

オープン前日の市民ギャラリーでの展示作業は限られた時間内で行わなければならなかったが、幸い多くの会員の協力を得て無事つくりあげた。会期中は823人（主催者調べ）の来場者があり、成功裡に終了した。

（記：有田裕一）

『鵠沼物語』の活字化・冊子制作

作家・今井達夫が鵠沼を中心に居住していた作家・画家との交流を克明に書いた『鵠沼物語』は、一部を除いて未発表作品であった。鵠沼を語る会では全編を通して作品を平成26年3月末日に活字化し、一冊の本に仕上げた。

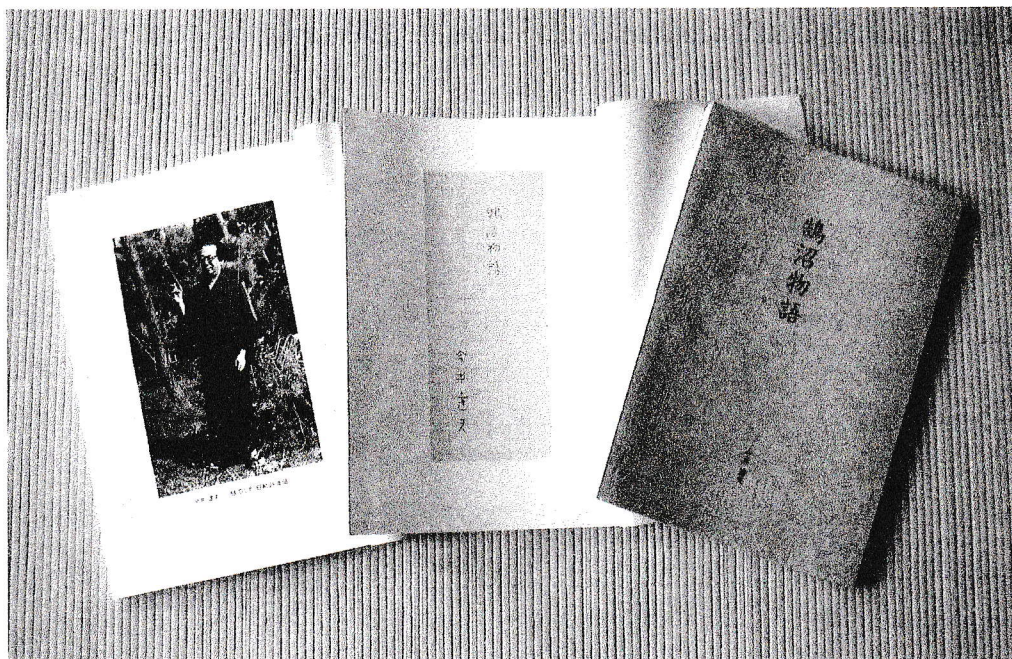
『鵠沼物語』は昭和58年、雑誌「三田理財クラブ二五」に「湘南の作家たち」のサブタイトル付きで4回にわたり連載された。今井達夫没後5年目に発表の機会を得た訳だが、これには平松幹夫（当時慶応大学教授・今井達夫の妹婿）の尽力があったと思われる。しかし、「三田理財クラブ二五」の休刊に伴い『鵠沼物語』の連載は、中断されてしまった。

この雑誌に発表された4回分は青木悠会員が編者となり、会誌『鵠沼』別冊として平成16年3月に復刻刊行されている。当時から『鵠沼物語』には続きがある、と思われていたが平成24年3月に今井クニ夫人が亡くなり、その遺品整理に来られた平松幹夫の息女・向井百重氏から、所蔵している今井達夫の原稿類の中に『鵠沼物語』があることを聞かされた。

原稿は慶応義塾創立150年記念事業に際し三田文学に預けてあるとのことで、さっそく三田文学編集部に連絡をしていただき、同年4月末に本原稿が送られてきた。原稿用紙1枚の表題、4枚の目次、それに500枚の本文という大作で16章からなり、「三田理財クラブ二五」に発表されたのは、わずか129枚、4章分に過ぎないことが分かった。

当会ではかねてより今井夫人より数多くの原稿類を預かり「今井達夫作品の活字化及び発表の許可」を得ており、会誌『鵠沼』に順次未発表作品を掲載している。平成24年10月には、馬込住人時代の文士たちとの交遊を綴った『馬込文学村二十年』（166ページ）を冊子化している。

鵠沼住人時代のことを書いた『鵠沼物語』については、改めて向井百重氏に一冊の本にまとめることの許諾を得た。「鵠沼物語制作チーム」の会員が手分けして原稿をPC入力、ページ構成、レイアウト、校正と作業を進め平成26年3月はじめに冊子原稿をまとめ、コピー/製本を外注。渡部瞭会員ご遺族からの寄付金15万円を冊子制作費に充てさせていただき、同月末日に仕上がった。



『鵜沼物語』B5判冊子

『鵜沼物語』冊子化の許諾を快くうけてくれた向井百重氏、迅速に原稿類を送ってくれた三田文学編集部・安藤京子氏、そして見慣れぬ原稿用紙の文字をPC入力し校正作業に協力してくれた「鵜沼物語制作チーム」の会員諸氏に、改めて謝意を表したい。

鵜沼に育ち、鵜沼を終焉の地とした今井達夫が鵜沼に出入りする文士や画家などの行動を描写した『鵜沼物語』は、読者を大正、昭和の時代へとタイムスリップさせ、今はなき東屋など鵜沼の様子が浮かんでくる貴重な資料といえる。

(記：『鵜沼物語』冊子制作コーディネーター 竹内広弥)

『鵜沼物語』冊子

B5判 224頁(本文:200頁、解説/年譜など20頁、中表紙=今井原稿用紙直筆「鵜沼物語」/今井近景写真など4頁) 150冊制作費 20万6,500円

贈呈先

藤沢市市民図書館/室 ― 総合市民図書館・湘南大庭市民図書館・辻堂市民図書館・南市民図書館・鵜沼市民図書室、鵜沼郷土資料展示室、藤沢市文書館、神奈川近代文学館、大田区立郷土博物館

コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク

ますます好きになったモース

西野 行（会員）

江の島北緑地に「モース記念碑」があり、調べていくうちにモースが日本人と日本文化を高く評価し、日本の科学技術発展に貢献したことを知りました。

エドワード・シルベスター・モース（1838～1925）はアメリカ人で動物学者。「腕足類」（シャミセンガイ・ハウズキガイの仲間）の研究のため、滞在も3ヶ月程度の予定で、1877（明治10）年6月18日横浜へ上陸します。翌19日、汽車で上京の途中、大森で車窓から日本初となる貝塚を発見。東京ではその年創設された東京大学教授の要請を受けます。モースにとって思いがけない偶然の重なりが、その後のモースと江の島そして日本との深いつながりになるのです。

「東京大学理学部動物学生理学教師」の契約をした翌日、7月17日モースは江の島へ行き、漁師小屋を借りた臨海実験所で8月29日までの43日間の江の島生活を始めます。モースはごく庶民的な日本人と日本人の生活文化に直に触れ、深く感銘します。モースは日本滞在中の記録を、日記「日本その日その日」と著書「日本人の住まい」に残しますが、日本人の印象を「とても正直である。家に鍵もかんぬきも、錠をかける戸さえない。貧しい人も礼儀正しく思いやりを持つ。簡素な衣服、整頓された清潔な家。ハエがいないのは特記すべき特徴である。どこにも落書きが無い。日本人ほど自然を愛する国民はいない」等触れています。

モースは1877（明治10）年から1883（明治16）年までの間に三度来日しますが、日本中を旅して収集したコレクションは現在アメリカのピーボディー博物館とボストン博物館に収蔵されています。日本の庶民の暮らしや心根に魅せられ、記録としてアメリカへ持ち帰ったその数は数万点に及ぶと云われています。

この明治10年代の日本人の生活を目の当たりにできる収集品の特別展が、昨年（2013年）秋、江戸東京博物館で「明治のころ」（モースが見た庶民の暮らし）と題して開催されました。日本の庶民が130年前日常生活で使用していた品々は、単なる懐かしきを超え、日本人の生活の魅力を実感するのに十分でした。

展示品は例えば、『日常生活』に関したものとして、明治の土がついた片側ばか

Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break

コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク

りが磨り減った下駄。素朴な日常用いた櫛や簪等の髪結道具や化粧道具。お歯黒道具。煙草入れ・印籠・髪飾り等の装身具。竹製・木製の柄杓やしゃもじ掛け。釜・まな板・減ったタワシ等の台所道具。瓶入りの未開封の砂糖菓子・イナゴの佃煮（瓶入り）・海苔（缶入り）・かつお節等の食べ物。以下《住まいと飾り》《子供》《あそび》《あきない（看板類）》《なりわい（大工・鍛冶屋・桶屋・木地師・提灯屋・屋根葺・庭師等の職人が使う道具）》などなど総数 320 点。

これ等のコレクションは、モースが名も無き一般的な明治の日本人とその生活に感嘆し、愛情と好奇心をもって接したからこそ可能だったのですが、中でも特に印象深かったのは、何度も何度も繰り返し書いて白地が残っていない真っ黒になった習字の練習帳でした。この真っ黒な練習帳を見て、暖かい心を持って日本人を見つめたモースの人柄がますます好きになりました。（にし の つよし）

鵜沼と江ノ電と私

内田 進之助（会員）

思い起こせば昭和 19 年。当時東京雪が谷に住んで中学校 2 年生であった私は弟を連れて鎌倉に行き、見物したあと江ノ電に乗って江の島も訪れ、藤沢駅を経て帰宅したが、江ノ電の車窓から見た鵜沼、藤が谷付近の松林に囲まれた住宅地の風景に感銘し、偶々伯父が鎌倉山に別荘を持っていたこともあり、大人になってからはぜひこの辺りに住みたいと思ったものだった。

戦後、父の仕事のため生まれ故郷の神戸に帰り、地元の大学を卒業して就職したが、結婚後、昭和 42 年東京に転勤となり、躊躇無く鵜沼に住むことにした。最初は鵜沼中学校付近の農家が新築した借家に住んだが、5 年後に現住地の藤が谷 4 丁目の土地・家屋を購入、移転した。

鵜沼に住んでから既に四十七年。娘と息子にも恵まれ、実にあっというまの半世紀である。途中何年かは仕事の都合で家族ともども海外に滞在したこともあったが、まさに終生の棲家となった。

Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break

コーヒースレイク Coffee break コーヒースレイク Coffee break コーヒースレイク

ここは江ノ電柳小路駅と鵜沼駅との間の西側で、通勤や外出時にはいつも江ノ電を利用したので、今に至るまで色々の思い出がある。当初、江ノ電藤沢駅は国鉄東海道線の駅南口に隣接した地上に乗降場があり、現在の小田急百貨店2階に繋がる高架駅となったのは、かなり後のことであった。

江ノ電の歴史や鵜沼の今昔については、数々の文献・著作・資料があり、当学会誌『鵜沼』にも多くの諸先輩が寄稿されているので、既にご存知の方も多いと思うが、鵜沼という地名には平安時代末期より1000年以上の歴史があり、江ノ電は開通後既に110年を経過している。

我々家族が住み始めた頃の江ノ電にはまだ鄙びた雰囲気が残っていて、乗客も少なく、未知の者たち同士が互いに話し合ったりすること多かった。幼かった息子が知らない小母さんから「坊や、素敵なお洋服着てるわね。何処に行くの」などと話しかけられたり、車内で切符を買おうとして小銭が無かったときには、車掌が「帰りでいいですよ」などと言ってくれたりしたものだった。

今では沿線住民の外出時や多くの観光客、また県立・私立高校数校の学生たちの足代わりとしての重要な役割を果たしている。

私の会社員現役時代は日本経済の高度成長期であり、退勤後殆ど毎晩、銀座での付き合い飲食や麻雀で帰宅が深夜となり、終電が比較的早い江ノ電を利用できず、タクシー待ちも長蛇の列だったので、藤沢駅から江ノ電線路沿いに十数分かけて歩いて帰宅したものだった。

本来の鵜沼村の集落は主に烏森皇大神宮付近から南に点在していて、江ノ電鵜沼駅はかなり離れていたもので、後になってから開通した小田急江の島線の駅名が「本鵜沼」となった。今でも、江ノ電鵜沼駅前の賀来神社の石垣の上に昭和3年建立の道標があるが、それには西方向に「小田急鵜沼本町駅」と実在しない異名が書いてあるが、何れにせよその付近の住民が、本来の鵜沼はこちらだ、と言いたかったように思える。

開通当初の江ノ電の藤沢駅と鵜沼駅との間には、石上、高砂、川袋、柳小路、藤が谷の5駅があったが、旧石上駅は消滅し、高砂駅が今の石上駅となった。また川袋・藤が谷の旧駅跡には今でも線路脇に空き地があって、その名残りを残し

Coffee break コーヒースレイク Coffee break コーヒースレイク Coffee break

コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク

ている。旧川袋駅付近には、昔は藤沢宿から江の島・鎌倉への古い往還（街道）が西に迂回していた境川を渡る「石上の渡し」があり、ここから江の島への早舟も出ていたそうである。またこの付近には江ノ電運行と近隣住宅用の電力供給のための発電所もあったが、跡地はかなり大きいマンションの敷地となっている。

東は藤沢橋・片瀬間の国道と西は小田急江の島線に囲まれた現在の鵠沼住宅地域は最近かなり細分化され、松林も減少して、景観維持の見地から憂慮される傾向にある。このため、各自治会の住民地域協定締結や景観形成地区指定への活動が活発化しており、私も町内会や「鵠沼景観まちづくり会」の役員を担当し、微力ながら協力している。

私の現住居付近の鵠沼藤が谷4丁目13、14は江ノ電西側から蓮池周囲の低地に突き出したような松林の台地で、当初9件の宅地しかなく、1戸当たりの敷地面積は500坪から1,000坪超だったが、今ではかなり多数の住宅地となってしまった。

いずれにしても、私は鵠沼と江ノ電には限りない愛着を抱いて余生を過ごしている。
(うちだ しんのすけ)

冬の訪客をおもてなし

猫の額ほどの我が家の庭にもさまざまな野鳥が訪れるのは鵠沼に住んでよかったと思うことの一つである。とくに冬場は木の葉が落ちて、鳥たちの動静がよく観察される。常連は、スズメ、メジロ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、キジバトだが、珍客ではジョウビタキ、コゲラ、ツグミなど、せんだってはカシラダカがやってきた。この訪客をもてなすのに、針金で小さなかごを作り、窓に一番近い日当たりのいい柿の小枝に吊り下げ、ミカンの輪切りを毎朝入れてやる。

食べにくるのはもっぱらメジロだが、これがめつぼう可愛い。たまにヒヨドリが隙を狙って先客に襲いかかる。そんな様子を飽かず眺めるのが近ごろの日課になっている。
(T.O)

Coffee break コーヒーブレイク Coffee break コーヒーブレイク Coffee break

耕二郎の老年

今井 達夫

おとし還暦を迎えた野村耕二郎は、去年妻を亡くし三月のち四十年近く勤めた会社を、非常勤取締役の地位でしりぞいた。これまでの生涯をしきりにかえりみる心持がうごくようになったのは、閑地についたためであろう。もっとも、その際、かねてから目をかけてくれた大先輩が別会社のあるポストを示唆したのに対して、しばらく静養していろいろと考えてみたいと好意を謝して辞退したのだから、自分から求めた閑地でもあった。

「よかろう。いつでも相談に乗る。しかし、老いこんではいけないよ。」

妻を亡くして間もない耕二郎にあたかな理解を寄せてくれた。が、考えることの内容については、いくらか差があったようである。

謹直な社員として次第に昇進し役員にまでなったのだから、たといサラリイマン重役であったにせよ順調な会社員生活だったというべきであった。

最も幸運な事実は召集をうけて満州へ引っ張り出されたにもかかわらず、終戦三月前に病氣療養のため内地の病院へ送還されたことである。シベリヤ抑留も逃れたし、もし胸部疾患によって入院しなければ所属部隊の南方転出にしたがって、孤島で全滅の一員になった、その運命からも逃れることができたのであった。しかも、内地送還とともに病状が好転し、終戦間もなく退院会社へ復帰した。

東北地方の山村に生まれた耕二郎は県庁所在地の中学四年のときと卒業の年と二度一高を受験したが、二度とも失敗すると同時に受けてパスした三田の私立大学にはいった。一高帝大というコースを望んだのは、親戚に外交官がいてあこがれの対象としていたからだ。志望を変えた彼が報告かたがた挨拶に行くと、恩師はこういった。

「君は善良でたやすく人を信じすぎるところがある。それは君の美点であり長所だが、どちらかといえば外交官に向かないかとも思う。転向はむしろ君のためになるのではなかろうか。」

そのとき彼はそれを慰めの言葉と聞いたが、のちになって思いあたるものがあった。そして耕二郎は現在に到ったのである。生得そういう素質は持っていたにちがいないが、四十年に近い会社員生活を謹直な態度で通したについては、蔭に

次のような出来事が作用したと見てしかるべきであつた。彼自身意識してのことである。

耕二郎がその女にはじめて逢つたのは、予科から本科へ進む試験の結果が発表された日で、前から立てていたプラン通り十五人ほどの有志が学校に近い埋立地にある料亭で懇親会をひらいた席であつた。東京下町生まれの級友が音頭をとつて芸者たちも数人はいり、にぎやかな宴席になった。その芸者たちのなかに雪香がいたのである。年がしららしく三味線を弾いたり座をとりもったりしていたが、席が乱れたころ彼の前にきた。

「あなた、お強いのね。お流れ頂戴。」

東北生まれで酒には馴れている。が、そういう雪香もつよかった。差すとすぐ返盃して献酬がつづき、飲みくらべをしようと雪香が持ちかけ、散会したら落ち合う小待合を教えた。そして、その夜のうちにからだの関係がついた。

耕二郎はととのつた容貌の持ち主だつた。遠い祖先に大陸人種の血液が流れこんだかと思える彫りの深い、剃りあとの青く、長い睫毛の持ち主だつた。

雪香はひと目惚れよとささやいたが、必ずしも口説とばかりは云いきれないものがあつた。彼は兩三度、悪友にさそわれて娼婦を買いに行つたことがあるが、その経験は味気ない失望を買つたも同然であつた。ところが、雪香は彼の眼をひらいた。

本科へ進んだ報告のため帰郷した耕二郎は、さまざまな口実をつくつて豊富な小遣いをせしめ、日ならず東京へ舞い戻つた。

彼の下宿屋は学校へ歩いて十分足らずのところにあつて、埋立地の花柳界へも歩いて行ける。夜になるのを待ちかねて足を向けた耕二郎は、先夜の小待合へあがつて雪香を呼んだ。大分待たせて座敷にはいつて来た雪香は、酔っている目で彼をみとめるといきなり抱きついて来た。

「あんた、たのもしいわ。」

「いや、もっと早く来たかつたんだが、郷里へ行って今日帰つたんだ。」

「嬉しい。飲みましょう。」

「ウン。これ、郷里はまだ雪がつもつていて、なんにもみやげにするものがないんだ、子供のおもちゃみたいだけど、目についたんで買って来たんだ。」

こけし人形はそのころまだ流布されていなかった。

「くださるの？　ありがと。なかなかいい具合じゃなくて。」

雪香はにぎりしめてにやりと笑つたが、耕二郎がその笑いの意味を知つたのは

のちのことである。

「ね、あたしあんたが気に入っちゃった。みっちり仕込んでみたいわ。いい？ 覚悟して。」

雪香は熱い息と一緒に、耕二郎の耳にささやきを吹きこんだ。

雪香が仕込んだのは、閨房の技術であった。その誘導が巧みだったのか、まったく秘戯を欠いていた耕二郎が素直な生徒だったからか、彼は雪香が満足するほど上達した。かの女は白紙に向かって思うままに絵や書を書きちらし、それは砂地に浸みこむ水のごとく吸収された。やがて暑中休暇にはいったが、耕二郎は東京にのこって情痴におぼれる日が続けた。

八月にはいって間もなく郷里から、相談事のための帰郷をうながす手紙が来た。雪香は途中まで見送ると云い出し、ふたりは福島飯坂温泉に立ちより二晩三日を過ごした。座敷の目の下に溪流がながれ、対岸は目のくらむほど高い絶壁が切り立っている。周囲から遮断された一室にとじこもりきりのはじめての遠出は、ふたりを刺激した。雪香はこれまで用いた道具や薬を鞆につめて携行して来て、あらいざらい濫用した。

「おさらいよ。」

「ウン、どうだろう、及第しそうだろうか。」

「成績優秀、品行方正。フフフ。」

「ありがとう。おかげでいろいろわかった。」

「でもね、ひとつだけ注意しておくわ。しろうとの娘さんにこんな手使ってはダメよ。」

「どうして？」

「そのひとこわしちゃうもの。これはね、めったな人のしらないことなの。あたしはある役者さんから伝授されたんだけど、昔から役者さんからくろうと、くろうとから役者さんというふうに伝わって来たんだって。あんたは特別。わかった？ 約束して。」

耕二郎はびっくりした。男女のことはみんなこんなものかと思いこんでいたのである。

「そうなのか。それでその役者どうした？」

「妬いてくれるの。嬉しいわ。死んじゃったわ。」

飯坂温泉の二晩三日はさすがに耕二郎を困憊させ、福島駅で北と南に別れるときただ目を見つめあって、うなずいただけであった。

県庁の所在地までの汽車のなか、乗りかえた支線の車中そして終点から三里バスに揺られているあいだ、彼はうとうと目を閉じたままであった。バスのとまる町筋には商店などが軒を並べているが、一キロほど水田のあいだの道を歩かなければならない。黒板塀をまわしたひろい屋敷には白壁づくりの土蔵が幾棟か並んでいる。これが彼の生家で、県下でも屈指の豪農であった。高齢の祖父母、両親、長兄夫婦とすでに嫁して行った姉、ふたりの妹が彼の肉親で、相談事の第一は次の妹の縁談で、これに異議のある耕二郎ではない。

第二の相談事はやや重大問題で、長兄の持ち出した経営法変革であった。

長兄は東京の農業大学出身で、将来の見通しを語った。近來プロレタリア攻勢がはげしくなり、農業地主の困難に対応する方策はなく、この際、山林地主に転向したいというのである。

「人との接触には面倒が多い。山の本を相手にする仕事には、なにか悠久なものがあるじゃないか。」考え方だけでなく、そういう性格の持主である長兄の意見に耕二郎は、全面的な賛意と支持を持った。余談だが戦後の情勢にぴったりと合致したのはしかし偶然である。父も賛成したが、高齢の祖父は小作小前の連中から縁が遠くなるのを淋しがった。祖父を説く役割を耕二郎は仰せつかったのだが、幾日かかかって成功した。それで帰郷の役目は済んだが、すぐには東京へ戻らなかったのは、自然の風物のなかにあつて体力のおとろえを自覚したからであつた。理由はわかっている。雪香とのおぼれた情痴生活にきまっていた。すると、彼女の残していった言葉が重量感をもつてのしかかつて来た。役者、くろうと、そのあいだだけで伝わって来たという秘術が、初心者というべき自分に耐え得るであろうか。あんたは特別よと雪香はいったが、特別とはどういう意味だろう。

耕二郎は兄の子供たちや休暇で遊びに来た姉の子供たちの相手になって、川へ泳ぎに行ったりキャッチボールをやったりした。もともと若い体は、そうやって日を過ごしているうちに体力を恢復した。おとろえを自覚していたあいだは、雪香との情痴を反省し警戒しなければならない女だと考えたりしていたが、かの女の残して行った言葉に対する疑問の内容が変化しはじめた。

あんたは特別よとはどんな意味か、心得のために知っておかなければならぬと力むのは、裏に逢いたい心持をひそめている。それに気づかないわけではないのに、耕二郎は心得のためと自分に申し訳を立てたのである。ひと月遅れの盆がすむと、口実を設けて上京した。その口実は同時に、豊富な小遣いをせしめる二重作戦でもあった。

早速、小待合に出かけた耕二郎は、座敷へ通る前に意外な知らせを聞いて、廊下で棒立ちになった。雪香が五日前に急死したという。女中と入れ替わって座敷に来たお上は、さらに詳しい話をした。男と寝ていてその最中発作をおこし、そのまま息を引きとったとのことであつた。心臓麻痺であつた。

「ですけどね、あれだけ色好きだった雪ちゃんとすれば、本望だったでしょうよ。お覚えおありでしょうけれど。でもね、今だから申し上げますけど、蔭では心配していましたんですよ。へたをすると、雪ちゃんに殺されてしまうかも知れない、ってね。先例がございますもの。」

お上のおしゃべりが毒を含んでいるのをかんじて、耕二郎は訊いてみた。

「かの女は子供のころお上さんと近所で、可愛がられたといていたが、…」

「まあ、そんなことっていました？ とんでもない、あたしより三つも年上。この土地に出てから知ったんです。」

耕二郎はお上のおしゃべりを聞くのが厭になって打ち切った。訊いてみたいことを口に出せば、もっと厭な気持ちにさせられるにちがいがなかった。結局彼は雪香については、何も知識を得なかったといつていい。疑問は残り、その後それが解けるかと数人の芸者と寝てみたが、そんなイヤらしいことよしてよと雪香伝授の秘術についての反応はなかった。

卒業後勤めたのは二流だが堅実な会社で、一年後、郷里のすすめで遠縁の娘と結婚した。会社員生活は前述の通り謹直な四十年だったが、家庭生活もまた同じくであつた。ここでは雪香のアドヴァイスは生きた。妻に対して秘術の片鱗も示さなかったのは、当然のことと思ひ、また、おとなしい妻は不満を洩らさなかった。そして、ふたりのあいだに一女二男を得た。

高齢の祖父母は彼が社会人として家庭を持って数年のち、相ついで亡くなり、両親は戦後やはり相ついで亡くなったが、順当な次第というべきであろう。他はみんな健在で、彼の妻だけが順序を狂わせたのをかの女は心残りだったにちがいない。一年ほど寝たきりの療養生活ののち死床でそれを口にした。

「お先に行くこと、申し訳ございません。わたくし幸福でございました。ほんとに、ありがとうございました。」

その言葉と語気には、真情があふれていた。耕二郎は妻の手をとり、静かに撫でてやりながら

「僕も幸福だった。感謝している。しかし、もう一度元気になってもらいたい。」

その心持にこれっぽっちも偽りの翳はなかった。妻は無言の微笑でこたえた。

四十年近く生活を共にした妻の死は当然彼に寂寥感をあたえたが、それとは別なある味気なさが耕二郎の胸に宿っていた。数年前父と母の年忌がかさなったとき郷里を訪ねて以来のことである。それは兄の案内で数か所の杉山を見てまわったことから始まった。

父の死によって遺産としてあたえられた山もそのなかにあったが、彼がはじめて見たいいくつかの杉山は目をみはるほどみごとであった。四十年前兄の意見方針を聞いたときはむしろ観念的に同感し賛成したのだが、今目にしたそれは、あのとき兄の言った悠久なという言葉が実感にせまって来る歳月をかんじさせたのである。

「立派なものだなあ。心から敬意を表する。」

「ありがとう。そういつてもらえれば、やりがいがあったというものだ。」

兄はおだやかに微笑したが、あのころの熱意は今尚燃えつづけている印象をうけた。

耕二郎の勤めた会社は二流だけれども、長い伝統と堅実な経営方針を持っているおかげで、戦中戦後の混乱期を狼狽することなく切り抜けることができた。入社に際して、君たちは会社組織の歯車になれ、そしてその歯車が欠くべからざる貴重な存在である自覚と誇りを持てと訓示をうけた。耕二郎はその訓示を忠実に守って昇進し、訓示をあたえる立場に立ったとき同じ訓示をあたえた。それを現在でも疑っていないが、四十年近い歯車生活に味気なさを感じているのも事実であった。

長い伝統と堅実な経営方針とは歯車であること以外は求めなかった。また、それ以外のことはやろうと思ってもできなかった。味気なさが兄の育成した杉山を見た日以来胸に宿ったにはちがいないが、退職してはつきり自覚したのである。それを考えてみたいのであった。

妻の一周忌が来た。その日、耕二郎は在京の近親たちに寺に集ってもらい法要をおこなった。在京とかぎったのは晴れがましいことを好まなかった妻の心持に添ったわけだったが、それでも妻の弟の家族、耕二郎の妹ふたり、長男夫婦一家、長女夫婦一家、まだ家にいる次男と顔ぶれがそろった。そのあと中華飯店で予定の食事をするときは、妹ふたり、二男一女、あとは子供たちだけになった。長男の妻だけが彼の肉親ではないが、ほかはみんな血縁で、長女のとりもちでにぎやかな席になった。

「ああ、たっぷりいただいたわ。これひとえにママの功德ね。ときどきこういう

パーティひらいていただきたいわ。ねえ、叔母さま。いかが、パパ。」

「お安い御用だ。いつでも申しこんでくれたまえ。」

「ありがと。叔母さまがたが証人よ。さあ、ボクちゃんたちもおなか一杯でしょ。お庭に出てお遊びなさい。叔母ちゃま、お願い。」

「いいことよ、いらっしやい。」

長男の妻が気さくに立って、子供たちが駆け出して行くと、長女が居ずまいを直しながら彼の方へ向き直った。

「さて、と。パパ。お話があるのよ。」

「ホウ。なんだい、改まって。こわいことはごめんだぜ。」

「いいえ、うちのことでない。お宅のこと。パパ御不自由じゃないかと思って——去年のお話、むしかえしたいの。一郎ちゃんの家族がご一緒になってお世話したらというお話。」

「それか。その話なら、去年説明したと同じ気持ちだ。当分のあいだこのままにしておいてもらいたい。」

「でも、去年とは条件が変わりましたわ。毎日おうちにいらっしやれば…」

「まあまあ、毎日うちにいるかどうかは、プライバシーの問題だぜ。好意はわかるが、今いった通りの気持ちだから。」

冗談めいた口調ではぐらかそうとすると、長女はあっさり

「わかりましたわ。じゃ、了解事項にいたします。それじゃ次の提案事項にはいります。」

「おやおや、まだあるのかい？ 質問会はこのへんで打ち切ってもらいたいな。」

「いけません。これからが本題でございます。あたしたち、パパが新しい奥さまをお迎えになることをおすすめしたいのですわ。御隠居なさるのはまだは早ようございます。叔母さまがたをはじめとして、あたくしたちみんなの総意でございます。」

「おやおや、これこそはほんとのおやおやだ。ひとを老人扱いにしたかと思うと、こんどは再婚話と来た。まあ、いい。御好意を感謝して考慮いたすことにしましょう。」

おどけた語気で話をまぎらせたが、一歩しりぞいてどういうことからそんな話が持ち上がったのか、自分の現状をみんながどんなふうに見ているか、じっくりと考えなければならぬ気持ちになった。

一週間ほどのち、電話の前ぶれがあつて、長女が訪ねて来た。先日の提案考え

ていただけたかと彼の表情を見つめ、

「今日はおどけたご返事をなさらないで。」

「考えたよ。それでこっちから訊きたいのだが、あの提案の出発点はどういうことなんだ？ つまり、ひとり暮らしがたよりないみじめなものに見えるということか、あるいは、僕がまだ新しい生活をはじめる有資格者とみとめてのことなのか、だが。」

「お答えします。もちろん、後者ですわ。あのときも申しあげましたでしょ、御隠居なさるのはまだ早すぎるって。」

「そうか。ありがとう。じゃ、僕の心境を聞いてもらおう。」

耕二郎ははじめて、先年郷里へ行ったときうけた兄の植林事業についての感動を打ちあげた。

「——僕は会社勤めが冗^{むだ}だったとは思わない。あたえられた役割をはたすことは、人間としても社会人としては尚のことだが、当然の義務だと思う。しかし、現在としてはそれだけでは不満で侘しくなったのさ。去年先輩からすすめられたポストに応じなかったのも、何かあとに残る仕事を見つけない、そのことを考えたためだったのさ。」

「パパ、立派よ。尊敬するわ。それで、どういうことおやりになるおつもり？」

「いろいろ考えたが、まだ決定するに到らない。慌てず、ゆっくり研究しているのだ。まだ当分生きられそうだからね。」

「だからよ、パパ。尚のこと新しい奥さまおもらいにならなければいけないわ。これ、ほんとにあたしたちの総意よ。ママもきっとお喜びになると思うわ。お見合いしてくださらない？ お相手は…」

「待った。飛躍しすぎるよ。いや、君の求める通り、僕も考えるが、決心がつくまでは相手のことは聞かないでおきたい。礼儀としてさ。」

語気はかるいがさらに押すわけに行かない印象をあたえたとみえ、長女は了承して話を打ちきった。耕二郎は三日間考えて肚をきめ、元の会社の医務室長を呼び出し晩飯に誘った。

「年甲斐もない問題でご意見をうかがいたいのですが。」

「どうなさいました？」

温厚な老博士は、話しいいように笑顔を向けた。耕二郎の持ちかけた相談は、現在話のある再婚についてで、はたして性的能力があるかどうか判定できるかというのであった。妻が寝たつきりになったしばらくのち、そういう機会をよそに

持ってみたとき不能だったことを告白して

「はたして可能か不可能か、不可能とすれば相手に対してすまないことになりま
すからね。」

「なるほど。あなたは道楽された経験おありですか。」

「若いころには——、しかし、結婚以来全然ありません。」

「わかりました。今のお話の場合は、多分に神経が作用していると思います。病
床の奥さんに対する拘りの心持ですね。あなたの御健康なら、不可能ということ
はないはずです。失礼ですが、もう一度テストされたらいかがでしょう。そのと
きと現在では条件がちがいます。」

老博士の解答は、大体予想通りであった。耕二郎はそのアドバイスにしたが
わなければならぬと、自分を鞭撻した。同時に、その暗示が役立つのではない
かとも考えた。雪香とのみじかいけれどもただれた情痴生活の経験を結婚ととも
に記憶から抹殺した耕二郎だったが、老博士のアドバイスをうけてからよみが
えって来ることを彼は許した。かの女ならば決心したテストについて相談相手にな
ってくれたらう。耕二郎はかの女の死によって憑き物の落ちた安堵感をかんじ
たが、かの女を怨んではいなかった。

あの情痴生活が意識的に謹直な生活態度を持つ因をなした、あるいは礼をいう
べき立場かも知れないが、しかし、そこまで感傷的な心持を持つには老いた。

ただ、相談相手になってくれたであろう確信は残っている、あの小待合のお上
は毒を含んで解説したけれども。が、耕二郎は独力でテストしなければならない
覚悟をきめ、あれこれと方法手段を研究しはじめた。成功すれば、これから選ぶ
仕事についても踏切りがつくかも知れないと自分をはげましながら。

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成 25 年 10 月～平成 26 年 3 月)

総務担当

平成 25 年 10 月例会 10 月 8 日 (火) 10 時～12 時 21 名出席

進行役 西野賢二会員

議題 1 巨樹めぐり報告 — 下見会の最終となった江の島編の映像による報告。

議題 2 公民館まつりについて — まつり当日の展示当番を決めた。展示内容および準備作業スケジュールの紹介と、協力者を募った。

議題 3 会誌 107 号について — 発行までのスケジュールが説明された。

議題 4 第 5 回「総合ミュージアムを語ろう」展について — 当会は『芥川龍之介と鵠沼とのかかわり』をテーマに出展する旨の報告があった。

お話 — 公民館まつり『鵠沼を語る会をご存知ですか』(10/19-20) の展示内容の事前紹介および展示作業の協力依頼があった。柴田会員より説明。

運営委員会 10 月 29 日 (火) 12 名出席

平成 25 年 11 月例会 11 月 8 日 (火) 10 時～12 時 21 名出席

進行役 中島会員

議題 1 会誌 107 号配布

議題 2 公民館まつりの報告 — 『鵠沼を語る会をご存知ですか』の展示反響等の報告があった。

議題 3 今井達夫『鵠沼物語』活字化・冊子制作 — 出版までの構想および日程が提案された。

お話 — 「徳富蘆花の『思出の記』を読む、2 倍楽しむ」と題して八角泰正氏(桜が岡在住)にお話をしていただいた。本文(P1-18)参照。

市民ギャラリーでの第 5 回「総合ミュージアムを語ろう」展 11 月 19 日～24 日

『芥川龍之介と鵠沼とのかかわり』についての資料展示・リーフレット配布。

運営委員会 11 月 26 日 (火) 12 名出席

平成 25 年 12 月例会 12 月 10 日 (火) 10 時～12 時 18 名出席

進行役 佐藤弘会員

議題 1 市民ギャラリー 第 5 回「総合ミュージアムを語ろう」展の報告 —

制作過程および反響の報告があった。事業報告記事（P47）参照。

議題 2 『藤沢の巨樹めぐり』選抜編について—12月17日予定の計画内容が案内された。

議題 3 会誌108号について — 掲載予定項目の紹介ならびに、広く会員からの投稿を働きかけた。

お話 — 鶴沼郷土資料展示室で開催中の「鶴沼公民館のあゆみ」を内藤会員の解説付きで見学した。

運営委員会 12月24日（火） 10名出席

平成26年1月例会および新年会

1月21日（火）11時30分～14時 23名出席

場所 鶴沼マリンロード（鶴沼海岸商店街）のアコレード

例会 司会進行 中島会員

『藤沢の巨樹めぐり』の概要および会誌『鶴沼』108号の進捗状況が報告された。

新年会 司会進行 中島会員

有田会長挨拶、午年年男の佐藤弘会員の音頭により乾杯。

出席会員による今年の目標、近況等披露。歓談。

恒例のビンゴゲームにより和やかなムードの中、懇親を深めた。

小林会員の閉会の挨拶。

内藤会員の一本締めでお開きとなった。

運営委員会 1月28日（火） 13名出席

平成26年2月例会 2月11日（火）10時～12時 19名出席

進行役 綿谷会員

議題 1 新年会の会計報告について — 会計内容の報告がされた。

議題 2 会誌『鶴沼』108号について — 進捗状況が報告された。

お話 — 1『藤沢の巨樹めぐり選抜編』昨年12月17日に実施された選抜編の映像をまじえての報告があった。

2『我々の子供の頃の遊び、行事について』後世に残すため、フリートークキングをおこなった。多くの会員から発言があり、活発な場となった。今後も継続するかを検討、数回は続けることとした。

運営委員会

2月25日（火）

11名出席

平成26年3月例会

3月11日（火）10時～12時

20名出席

進行役 岡田会員

議題1 会誌『鵠沼』第108号制作について — 最終掲載項目と進捗状況が報告された。

議題2 『鵠沼物語』活字化・冊子制作について — 今年度内完成予定で進捗している旨の報告がされた。

議題3 明年度活動プランについての提案募集 — 事業計画として取り上げたい項目の提案を広く会員から募集することが展開された。

お話 — 『湘南の眺望写真展』（鵠沼郷土資料展示室で開催中） — 鵠沼を中心とした湘南の素晴らしい眺望を紹介。江の島を基点とした眺め、逆にどのようなところから江の島が見えるのか、丹念に足を運び数多くの写真を撮影、提供した市川勝典氏から説明を受けた。

運営委員会

3月25日（火）

12名出席

平成25年度事業計画および実績

事業計画として総会で提案された項目に対する結果概要は次の通り。

- 1 公民館まつりの展示：『鵠沼を語る会をご存知ですか』を例年スタイルと異なり、手書きで資料を制作し展示した。詳細は本文（P45-46）参照。
- 2 史跡めぐり：今年度の実績は無し。
- 3 藤沢の巨樹めぐり：下見会と選抜樹めぐりを行い完了した。詳細は本文（P29-39）参照。
- 4 鵠沼の古い地名の由来など古老に訊く：古老候補調査継続中。
- 5 今井達夫未発表作品プロジェクト『鵠沼物語』活字化・冊子制作：3月末日完成。詳細は本文（P48-49）参照。
- 6 新たなテーマが提案された場合は都度検討していく：新たな提案は無し。

新規会員（9月から3月の間に入会 敬称略）

守谷 俊博（もりや としひろ）

会員総数 57 名（3月末日現在）

（文責 佐藤 弘）

編集後記

- * 花の便りが南の空からちらほら聞こえてきます。本号がお手元に届く頃は盛りが過ぎているかも知れません。
- * 11 月例会で話された徳富蘆花の『思出の記』のモデル探しを八角泰正氏が寄稿して下さいました。その後日譚。モデルとされる曾我部牧師がハワイのホノム教会に赴かれたのが 1894 年 3 月 26 日。今年で満 120 年になる、その記念式典をこの 3 月 23 日に举行するとの通知が、同教会から八角氏に届いたとのこと、氏は本誌を 1 冊ホノム教会に贈呈されるそうです。
- * 西村望会員は鵜沼海岸の施設の変遷や行われた行事などについて回想して下さいました。西村さんには、まえに写真のご提供を受けたことはありますが、今回は原稿も書いて下さいました。
- * 山上英男会員の「くげぬま断章」(Ⅷ) は、長谷川路可を取り上げ、鵜沼に存在する路可の直筆画を取りあげられました。
はからずも蘆花・路可とふたりのロカが顔をそろえることとなりました。
- * 「藤沢の巨樹めぐり」を終了しプロジェクトリーダーの佐藤弘会員にまとめて頂きました。うち名木を厳選して鑑賞する最後の企画、選抜編に参加した報告を岡田が、全調査に参加し巨樹の靈感に打たれた森岡澄会員がその連想からスペインの樫の木の思いを綴られました。
- * 事業報告は、昨年の「公民館まつり展示」、「総合ミュージアムを語ろう展」参加、「今井達夫『鵜沼物語』冊子化」という三つの事業の報告です。
とくに『鵜沼物語』の冊子化は『馬込文学村二十年』冊子化に次ぐ事業で、入力、校正に携わった皆様のご協力と故渡部瞭会員のご遺族からの寄付金を出版費用に充当することによって実現しました。
- * **Coffee break** には、内田進之助会員、西野仁会員のお二人がはじめて本誌に寄稿されました。こういうことが会員相互の親睦を深めていくと思います。次号では“私が書こう”という方が何人か現れるのを期待します。
- * 今井達夫遺稿、第 13 回目は「耕二郎の老年」という小説で、まだ倒れる前、右手で書かれたものです。
- * 私事、昨秋満 80 歳となり、この 108 号をもって編集担当を降板します。思えば 95 号からの 6 年半の間、会誌のほかに『相模国準四国八十八か所ガイドブック』『馬込文学村二十年』『鵜沼物語』と 3 冊の出版物を作るのにかわらせて頂きました。有難うございました。(岡田)

『鵜沼』 第108号
平成26年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸2-10-3
鵜沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>